やまと小学

共五

六

二

ロ 13
2318
5 止

倭小学巻之六

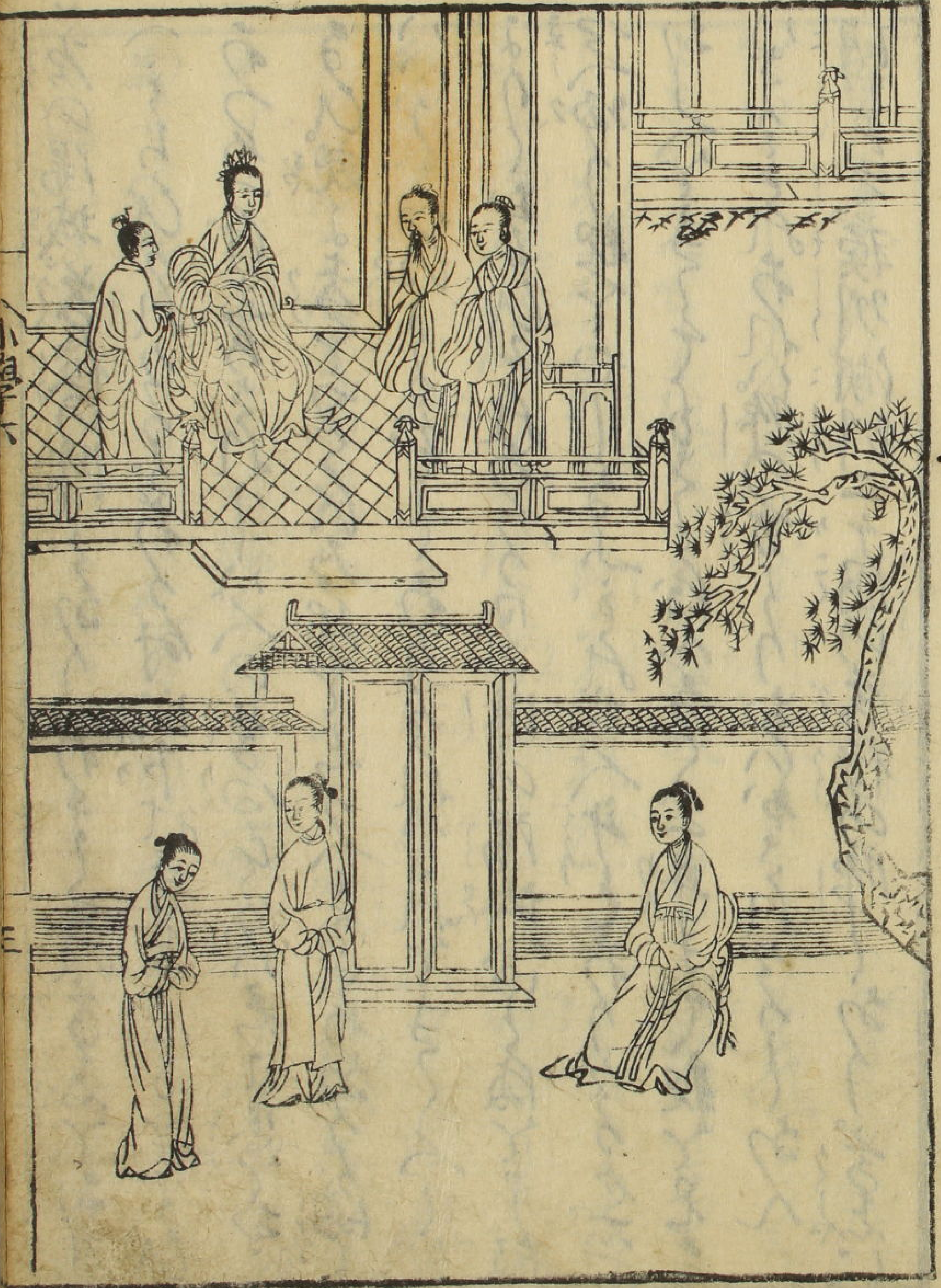
善行の篇第六

○善行はよきおこなひなり。此篇は漢より宋朝まで の賢人のよき行跡ありしをあつめしるして。立教明倫敬身の道理を備へてあらはせる也

○宋の呂栄公は正献公の長子也。父の正献公も母の申国夫人もともにたゞしき君子なり。されば家法をきびしくし給ふのかぎりおもしといへどもおしへいましめ給ふにはすこしもゆるがせにし給はずしかるがゆへに呂栄公十歳ころより父母のあへ(?)に侍(?)せて

るゝに極寒極熱の時節にても座を命じ給はざれ
ばすくはず座せず。毎日衣冠たゞしくして長
者に侍らしめ、いかなるあつき時節にても父母
長者の前にては衣冠をぬがず。ねやの所も茶屋
酒屋のうちへたちよることあらず。市井の物語淫乱
あるハ艶曲ハ一たびも耳にきかしめずして。不正の書非礼
の色ハ一たびも目にふれしめず。焦伯強を迎へ
師につけて学問させしめ給ひし焦先生もきび
しくおしへそのおろかなるありされハ弟子の内より
あやまちなきを見れハその身によびつけおきて。

一日一夜までもつねに物いひ給ハずそこにて弟子たち
おそれてつゝしみあやまちをあらためきこゆれ
ハ機嫌をとりて詞をもかけられけるなり。呂栄公ハま
て父母の教訓をきびしくうけて焦先生の死
遵守かくのごとくきびしくされハその徳器ハ大にます
ぐれたまへるとおもはしぬるもことハりなり
呂栄公の妻張夫人ハ張昷之のむすめなり。いまだおさな
きうちより父母ともに寵愛し給ふのみならず。お
としへしも平生いさゝかのすきまでも法をまもりて。さ
だらぬ事しかば。合物を用ひさせしのますても



飯汁ハかへてもくはせ、魚肉の類ハ二たびくはせず。呂榮
公ハ方へよめいりせられて後、母の張夫人ハ家内にゆ
きとゞかず、何ごとも今まで料理の事ありけれ
ハ、母無道しきひまもなしとてされたるハ、母ことん
べきことゝ節倹にくらし、料理じてそのうへ家法
を厳しくつゞきたるに、何とて割し始をおそく
つけられたりとぞ

唐の陽城(やうじやう)学校(がくかう)の師(し)となり。おほくの学者(がくしや)をおし
へみちびかれけるが。おりふし門下(もんか)の学者どもをよび
あつめ申されしハ。人の学問(がくもん)するハ。忠(ちう)におこ
なひ。親(おや)に孝(かう)をつくさん為をしるべきための修行(しゆぎやう)
ハいふにおよばず。それぞれときゝてつげ
よりしたがひそれぞれ日に師(し)の陽城(やうじやう)へいとまをこひ故
郷(きやう)に帰(かへ)り親をやしなふもの廿人斗ありけるとなり。其
おしへをきゝてもさらにかへらず三年(ねん)まで親をみま
はざるものあれハ。師の方よりおひいだされけるとなん
胡翼之(こよくし)蘇州(そしう)湖州(こしう)二ヶ国の学校(がくかう)の師となり学者(がくしや)に

おしへられし法式目(ほうしきもく)をおきて弟子(でし)の作法
をいましめられしが。まことにそれぞれこまかく
よくそのゆゑれ或(あるひ)ハ夏(なつ)の炎天(えんてん)にても衣冠(いくわん)たゞしく
して学者(がくしや)に対面(たいめん)し師弟(してい)の礼儀(れいぎ)をおもくそうさせ
られ。学者への時も義理(ぎり)の肝要(かんえう)なる所をいゝきかせてハ。
みづからくりかへして弟子(でし)によくきかされけるがゆゑに
とく人の徳義(とくぎ)おのおのに。そのうち蘇州(そしう)の学校(がくかう)へは
ましまして天下より帰服(きふく)なしてく学者(がくしや)あつまりて
ありさまなりしとぞ。それおしへみちびきたるし
きゆくにはおほくの学者もこのごとく師(し)の徳(とく)

よ化して釈迦仏法あやまりとなりて、よのつねの人々を
わりなりゆへ、いつまの世へうちちりなる尊者出て大に
行の人、その誤りし仏法をみて、はじめて胡先生乃弟
子なるべしとぞ。しかしても志りなりしあん

明道先生。朝廷へ参向し給ふには、天下をおさむる事を
風俗をただし、賢人をえらび挙る事をとき、今の世の
ハ儒業そかへりくの師ともなるべきさくをあらわし、
あつめ給ひて、朝夕正学の道を議論せしめ給ひ、人倫物
理の道をとりしわけ、小学を出して人をこしらへき、
凡夫なりとも、そのげにつとめは聖人ともいたる

必ずさとりを志しめて、その徳あきらかなり。況
たるときなりのあれは、都の学校の師となり、次は国々
の学校へも出て、学をみちびかせ給ふべしとぞ

伊川先生。崇政殿説書に任じ給ひなかに参向せて
まづ学校ハ礼儀をまなぶ所なるに、毎月学ことに
あるは下をたてくべからむ。よろしくそのひのえを
おしゆるなり。そのかなるにおしてあるべし
このやう学をおしへるに、文字ハ課役として
めて、学ぶ下をたてて、わかるをしへあきさ
そのおうへびそうに、師の前へよびつけておしへきち

びくべしとぞ

○藍田の呂氏郷約に曰して、故郷のともがらと契約せられしハ、かれにちかひしハ善をこそハかならずあひすゝめ、あやまちをきゝてハかならずいさめその家をよくおさめ、その家をよくおさめ兄つかうまつり、子孫をもをしへて、下部のものをきまくおさめつゝ、ひとしく経たからをやすくさ法親類によくしたしみ、友だちをたすけあへり。廉直にまもり、道徳をおこなふべきなり。人の災をすくひ、もろ〳〵のことのむかしをぞせらるゝ、人れん代中行

しきことをあらしめ、是非をさだめ、利をおこし害をのぞき、よろづ家業をつとむべし。酒色をこのみ、国らびにうけ、勝負をあらそひ、喧嘩口論をこのみ、沙汰すべからず。礼法をたゞし、孝悌をおこなふべし。年たけたる人をうやまひ、ひとしく心をかよはし、人のうれへをおもひやりしりぞくべからず。まつりごとをたのしみて、人をもてなすうれしくおもひ、よそのあやまちをもきゝて、わざとかくのごとくなるべし。我をほめむ人をほむべからず。らば人のよきことをもいひて、悪をおさへてへからず。人のうへをとがめて約束しておこなふべし。

小學六

らん。およそしきすといひて人の見るところをよきすべから
らず。人のうち艶(えん)書をとりよくべからん。おりてむさきハ中
よきあり。そして、げにそうしたのあるべからん
べし。そうじのハよきうくべからん人のおしきするのをえ
かきんとせんべからん人の前(まへ)にしておかしたるといひ
あさんべからん。利欲(りよく)にふけり人の物をうりかへゆべから
くして人の物をとりぐるまたのまれてあざむくまず
おのべからん。おしきなき友(とも)にまじはるべからずむ身のおか
きことへむまさとあそびありくべからん。たりはれすそい
ひへとわするるべからん。馬(むま)をはせはりをなけとうおわ

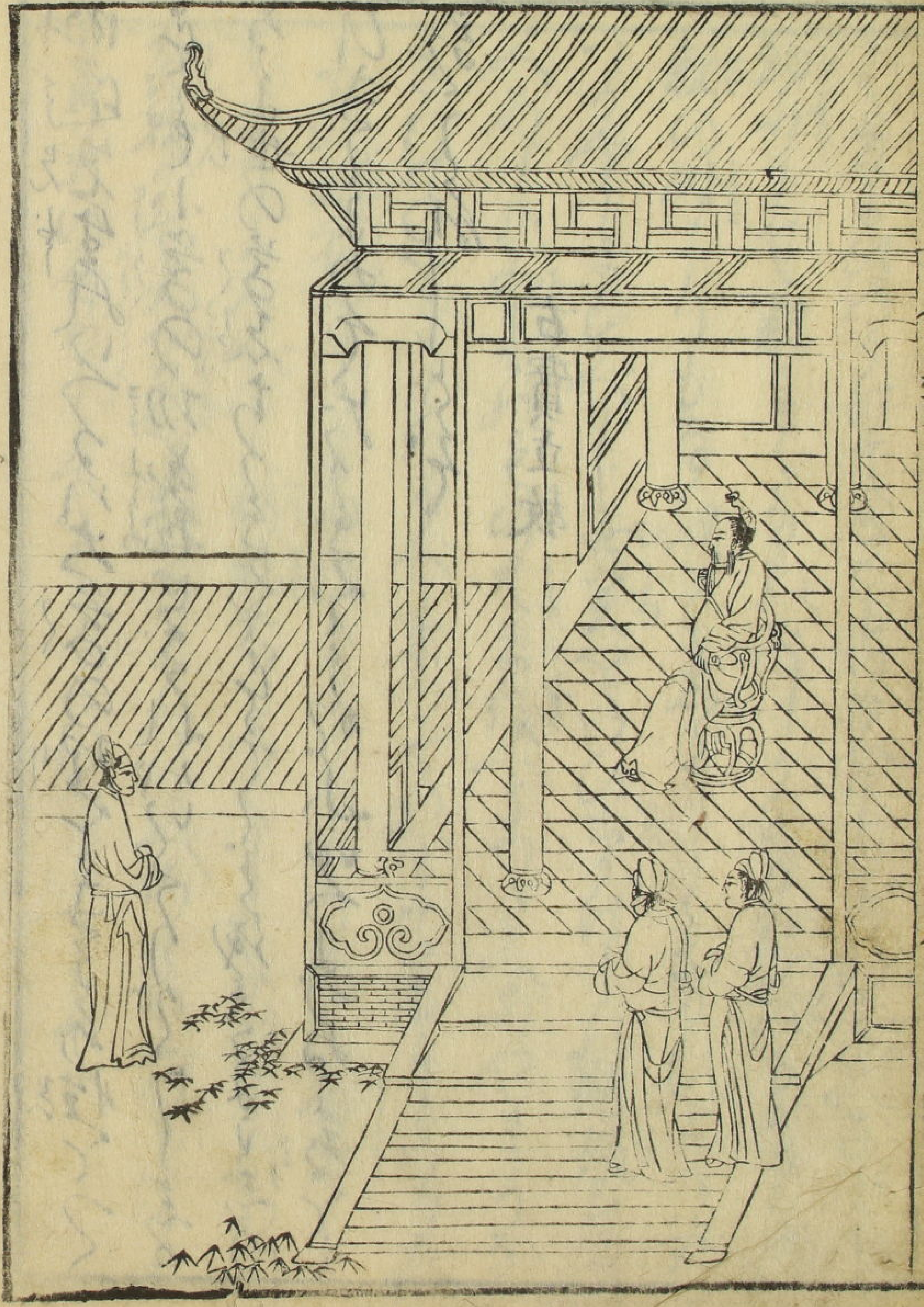
そびきたべからん。ひすが邪色(りそく)をとりわきてきざすそのあるべか
らず。盗者(たうはい)ふるまひの邪戯(ござさ)談(わう)おもはるべか
らず。いづれもいとびにまじしてひ目(もく)べか
らん。衣裳(いしやう)をかざりてよきにあるべからん。又あまり
りまハさそのかるもの無礼也(ぶれい)。狂戯(うぎき)のはをやるへか
ん。事(こと)よのそんでおもてうるべからん。心体(しんたい)のよをそ見おく
るべからん。おもはさる邪気(やき)をうらやみ好むべからん
淫(いん)にそもそもあり。狂言(きやうげん)ハ又ハ不吉(ぶきつ)なることのよあり。さ
らじ。ゆきさきがまかいしたぞくべし。或ハ色雑戯
寝入(ねむりとこぞって)よおいやといふひすべし雑戯(えんざ)よおつるべから

ざるにひきつけてきくもいふべし。されば幼稚のおさなごも
幼少にて親にわかるれば、たしかなる親類もなくば、
親の時よりもちたる縁をしたしくおもひとりた
つねやしなふべし。婦とても家のうけつぎ離縁となる
人あらば、幼稚なるものの友とて縁へうつるべし。おやまのあ
まじはりをこころうべし。それまでもこころいた
くば、闘あらそひにおよぶことは、よりあひ合力し
て、うちよるべし。行跡ただしくしても、ざまれあひ
慇懃にて朝夕もおくりかはし、おのれもまた
よりあひ合力してたのむべしとぞ

明道先生のいはく、大学の理をきはむる性をつく
すとも、小学の功を躬行せざれば、いたづらなるべし。さる
ほどに世の学問ちかきことをもてしたしく勧まするにあり
ひきよせてたのしまさるれば、かへつてふかくつゐになるべし
おこなはれしとぞ

右實立教

○漢(かん)の江革(かうかく)は。ようして父(ちゝ)におくれ。ひとりの母につか
へありけるが。そのおりしも天下(てんか)みだれ乱妨(らんばう)狼藉(らうぜき)し
けるゆへ母をせおひおほくの険阻(けんそ)なる山坂(やまさか)をこえ。
けるが賊来(き)れば。やのことひろひ母のたてまつりて
いのちをつぎさせけり。さうして狼藉人(らうぜきにん)へゆきあひ。
とらぬまらんとしける時。江革(かうかく)なみだをなが
し老母(らうぼ)のあることをたすけ給へとしきりにわびごとしけう
も其詞(ことば)のあはれさにて。たけきものゝふのこゝろ
も感動(かんどう)させられごくありけれバ。狼藉人(らうぜきにん)もゆるさせ
孝(かう)子(し)まことにあはれなれば。おそれにありひられておろすに。



遊(あそ)びすしてたちくるのこゝろしらばおもはさへ難(うへ)し
わかきの道(みち)をしりまでもおしへつかはしくるしかりざして
下部(しもべ)しいかにやまそおちゆき径(とし)のかぞぶ飢饉(きゝん)おりこ
くるれバ力(ちから)なくべきうづり衣(きぬ)さへなくしておさうさ
つまおりぎそわしよそくまやしかれ日用(ひよう)して母をや
しなひ又かうくわざ身ハ貧(ひん)なるそいふなれども母へ
の孝養(かうやう)におろそかならずうしもとりしかしきるやしよ
しも父祖のやしなひのこおしんぢ身よ肉(ぬく)ひかうしを
よの物よりつきまでごこくそおへまうりてぞとつし
するのぞうせまへりせざりなりしなん

○漢(かん)の薛包(せつはう)ハ継母(けいぼ)の讒言(ざんげん)によりて父にあいはなされ
ながらかりたりけり孝心(かうしん)ふかきうまれなれバ家をはなれもの
びもせてなにかずしこそれども父さらにゆるさ
ざりしてて杖(つえ)をとりてうちげしくうちたゝかれける
ゆへぜひなくして家をさりてかまりいわをたて
かりそめかたちおくへなしこよそくあさくしそ父の家
のいり掃除(さうぢ)をせけるを父又これをいみつけおかりけるいっ
てもしや家の近所(きんじよ)にもおりざりきりゆへ里(さと)もろれ門(もん)
のわきにぶりよまうりいゑをつくりすみ朝夕(てうせき)ハ孝行(かう)
ようし父の家へゆきそでんかくよおりともおかひて樣子(やうす)

をたづね晩におよびても又里門に行て毎朝毎夜
一年あまりもかくせりけれバ父母もさすがに感動して
家におかれやはづかしめゆるして家にかへされけるかくて
ちゝはゝうせられて以後薛包の腹がはりの弟財宝を
分させ別におのおのへしと志さりよりいろ／＼いさめ
けれどもちゐずして家職と財宝を志けつがわけ
かゝるときにも薛包ハとしよりたる物をとりて
家来をとりていひけるハ此ハ年久しく我家に
まつかへてよれしおすしく用をつかひなれたれバ
此ほかにまで我もかくとゞむべしとぞいひける田
地をとるにハあれたるやせ地をのぞみていひけるハ此
田地ハ我わかき時より自身手をかけて久しくひらきたれ
バこゝろにおもひつきてこれをとるべしと器物のたぐひハふるく
そんじたるをとりていひけるハ此うつは物も
年久しくわがもちゐなれたる物なれバいつまでも
用ひてやすく心にかなふとてよろこびけるとぞ
薛包ハかくのごとく弟の財をわけしかども弟ハ
さしく合力しあつさせども幾たびもほどこしけれバ
かうなるしうんあたうかもけんとのぞむ

てがらは又合力をとゝのふるのちからしきたるまゝあり
とぞや
○晋王祥はいとけなくして母にをくれ継母が讒にて
ちゝにもにくまれつねに牛やの掃除
をさせけれどもいさゝかうらみずあつかひせられ王
祥をそこなふ事しんずるぞれはなほつとめけ
ればりやう孝ふかくなりて二親の病やまふ
ひ給へば昼夜おびをとかず看病し薬餌をも見
つからこゝろをそへてたてまつりけり継母
ある時生魚を食せんとすと称しければ王祥

きゝておもひてどこへまゐりせんとおもひ川のほ
とりへゆきさむさはげしき冬のことなれば川みなこほり
さこほりはてゝせんかたなし王祥は衣をぬぎて
りひ衣をときてそふもありて氷のうへにふしけり
ぬりて身をもりあたゝめけるに氷たちまち氷
おのづからとけてそのあひよりふたつの鯉をどり
いでければよろこびてとりかへりて母
にあたへけり又かの継母黄雀をくらはんと
おもひければ王祥これも又いかにもして
とらんとおもひけるに黄雀むらがりきたる

まそし王祥か家の幕の内へいりけれハやかてとひいりて
たてまつりけれバこれをとらへてふ思議のおもひをなし
ミなこれ孝行ふかきによりて天地も感動せらるゝゆへな
るべしとぞいひあへりけるその家にみのなる木有
かしこくみのりよくなりたりけれハ母命じ
て王祥に番をさせられけるに風雨の時ハ王祥か
桃をいだきてなきつゝまもりあかしけれバ
よそなり

王裒が父王儀ハ魏の将軍司馬昭につかへしに東関の
いくさに司馬昭うちまけ敗軍して諸軍勢おほく
ひぜうびりをとりしときつかさその咎誰にかあるべし
とゝはれけるに諸軍勢とかく申すものもなかりし
に王儀一人すゝみ出てまうしけるハいくさの勝負ハ大将の
つかさどる所なれバ諸軍勢の咎あるべからずとぞ
いひければ其ことばゆへ司馬昭おほきにいかり。
やがて王儀を引出しくびをうたれけりされバ王裒
父の非命にしてうせられしをなげきてそれより
隠遁してつゐに仕へずして父の墓のほとりにありけり

ありて朝夕墓に詣でゝひざまづき礼拝して
そのそばなる柏の木によりかゝりてなきさけびけれバ
なみだそゝぎて柏にしみつきけるにその木もつゐに
かれたるとぞ毛詩の蓼莪の篇ハ父母のふかき恩をのべ
たる詩なれバ王裒父のはやくうせ給ひてまづ哀みに
くるしみ給ふことを思ひあはせて此篇をよむ時
ハくりかへしくりかへしてなみだをながしけるま
まなぶものゆへ弟子たち詩経を王裒まなび
時も此篇ハのぞきてよまずしかりしとかや。
家まづしくして身づから田をたがやし

かれが父は魏の人数曹操にしたがひしも
おなじくつくしたりしぞの父を害せし司馬氏天
下をうばひとりし故の方に報ぞとて晋の世にも
ひかれは王裒一生の間西にむかひて座せざりし晋
にしたがはざる事をあらはせしゆへなりとかや
○晋の王延は親につかへてつねに心ろざし厚く
とをし孝を言しなかに親のまへにはかく
とおのれが身はうちにふしおのもとにかくれて
まりなりけるまゝにそれは命のさむさも。
まうけはらはせてかへるのがまゝにさま／＼衣をとる

も孝をれにとくし親にはかうし孝味の合ゑをとりとへの
やしなひのほどぞ
○唐の崔氏の妻が舅夫人は志つしものつふへで孝行せ
志ことめでしき歯なしくそわけられば合つき乳
らかしてすりかたりしに舅夫人無病にのながく
つまで志らずとしめすへてせまへらせしれ
しすりかつがつまにしつまめ乾舟のおらでめつ
ぶくへなひさんともでふしんともきさせおつる
志くとめきんくおまつゐひをでに家嫁と身
し我の一門の人くことしくそおつまりきたる中

まて志をとめられしハ、これ年久しくよわき長(ちやう)
夫人(ふじん)の曾孫(そうそん)ともなりて、つゐに顔(かほ)をよろこばしめねが
ハくハ唐夫人に子あり孫(まご)ありて、われにつかへられし
ごとく孝(かう)ありなば、世々かならず繁昌(はんじやう)すべし
とぞいはれける

○南斉(なんせい)の庾黔婁(ゆけんろう)孱陵(せんりやう)といふ所の令官(れいくわん)になりゆきけ
るが、ゆきつきていまだ十日もたゝざる内に、心(こゝろ)
むなさわぎし、一身より汗(あせ)ながれけれバ、必(しぎ)父の身
うへにかはりたる事あらんとて、官(くわん)をすてゝ故郷(こきやう)へ帰り
く父の病(やまひ)易(ゆい)くおもくわづらはれけるところ

そこにありひさしく痢病(くわり)しくるしまれしのみか
くすしハやまひの吉凶(きつきよう)をしらんとおもはゞ糞(ふん)をなめ
こゝろむべし、味(あぢ)はひ苦(にが)けれハよく、あまけれハあしゝと
いふに、黔婁(けんろう)すなはち糞(ふん)をなめ見られけれバ、甘くして
その味(あぢ)はひあまくなめらかなりしかバ、いよいようれひ、毎夜(まいよ)
いのりて北斗(ほくと)の星に祈誓(きせい)をかけられて、みづから
がかハりにならんと肝胆(かんたん)をくだきいのりけれバ、孝(かう)
心のふかきゆへ天に通(つう)じけるにや、程なく父の病平(へい)
愈しけるとなん

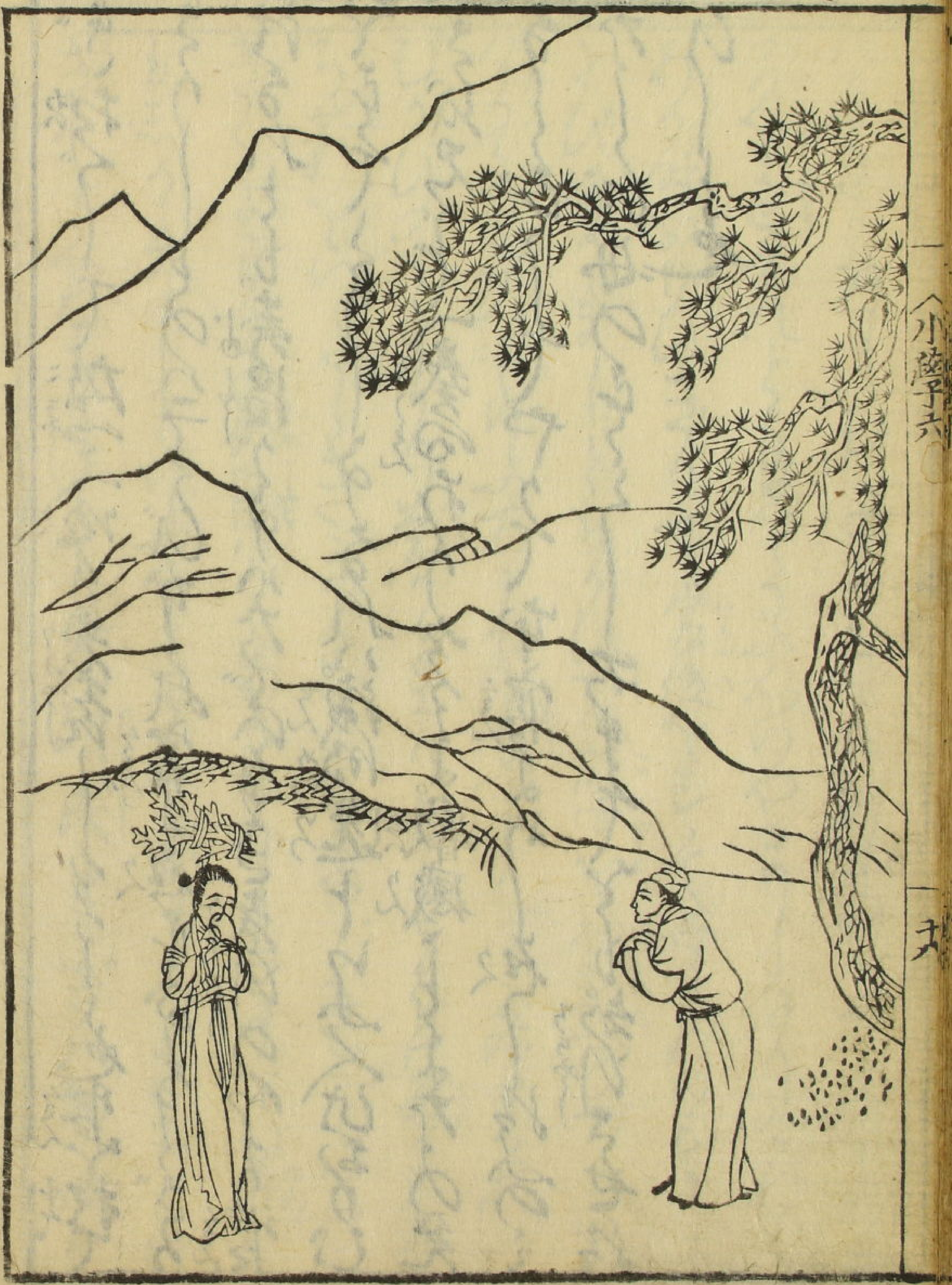
○海虞(かいぐ)の令、何子平(かしへい)、母の喪にあひて官(くわん)をさり喪(も)に居て

かゝるまづしきなかにもつゝしんで、たゞ一への家
くずれかゝりしをも、喪乱世飢饉のなかなれば葬礼もとい
とゝのはずありしかど、はかりなくそのとしげきさむ冬を
すごしかれにて夜衾をきず、冬も涼しきあつきにも
らず一日よりづゝ米二三合を粥として野菜
塩噌さへもちひて、月ひを年月にわたりける家
やぶれ屋を換して風雨をふせぐのみなりしかば
とおいの伯與錢をおくりて修理しまいらせんと
いひければ、子平はうけながら母にむかひていひけるは。
これ母のなからんよりまへにすくはずして天地

あれ一罪人なりしかうのまへず家て修理せんといひしも
ひとへにきゝいれずして、そのかはりにそのくらき蔡興
宗もこの事を護とありしかば、つゐにすて置をれぬ
くわしとめでゝそ母をかなしむ事せられける
となん
○朱寿昌は七歳のとし父朱巽母とあひわかされけ
るゆへ、寿昌とうしたくかなしく思ひて母をこひて
あるところをたづねてもとむれどもしれず。つゐに
まいかなるにあらず、あけくれ母のあはんことをゆくすて
のしむるすくて酒肴をもくらはずといひあひて

ハるきさうおしむるのぎりおしかくてみ千年う
おくさるまれともぢてよんかやまのしまりてれど。
おう付おりひきりて官位をもて母によわりぞ爪二
えび悩りまのしとちゝひて孤寄や郡縣へのがり給
くるまの國刎とハへ示しそ召しさりし者とか悲心
ぴりひのくさうりきりしまりくろとぢ代名よそべ
ち敷そりくきさこきてきろぐくぞきこてしめて
きくよぶらよ孝養ハくわきまりしきさるのやハ愛よ
もまつきまじとりかやきまそておぢろうきちくぞ
きてとくハぞらくして母の劉氏よまつぎれおし。いそ

ぎおゞして孤寄へ悩り孝養しくかしも官を捨て
きりしものハてゞびのりも官に召さるゝのしぎろ
はされとも孝養がるのハたゞひとりきさ孝行のんつり官
とまそてこえしうのまれハ洗馬にとりふへひおりむ
こさ我見んどし奏聞ありくろすよ哀感こふまたの免
うずしきぞしてやりそ女官よめしぬし終らのこ
なゝしゞ母のもそこし示まそにとも終らせ給
ひしとや



○伊川ハ先生喪をおさめ給ふにハかつて佛事をまじ
へあつからず世俗もし葬禮喪の禮祭の禮ないうる
までみな儒法のごとくし給へりとなん
○漢の霍光が除弟がたち禁中へ出仕するとき毎日に
つねのわたりくぐりて座敷のとりおきてもまりて常
住ちうしきりされハ官人さらふ黒つよのあのひぴて
うる志ろしとき動てこころとしれるまでに平生の
のかひすもちがハざりたるしせこれまでしまるげ細法
あしそうべし
○漢の汲黯ハきよハめてもぐるしさかゆなりかれハ

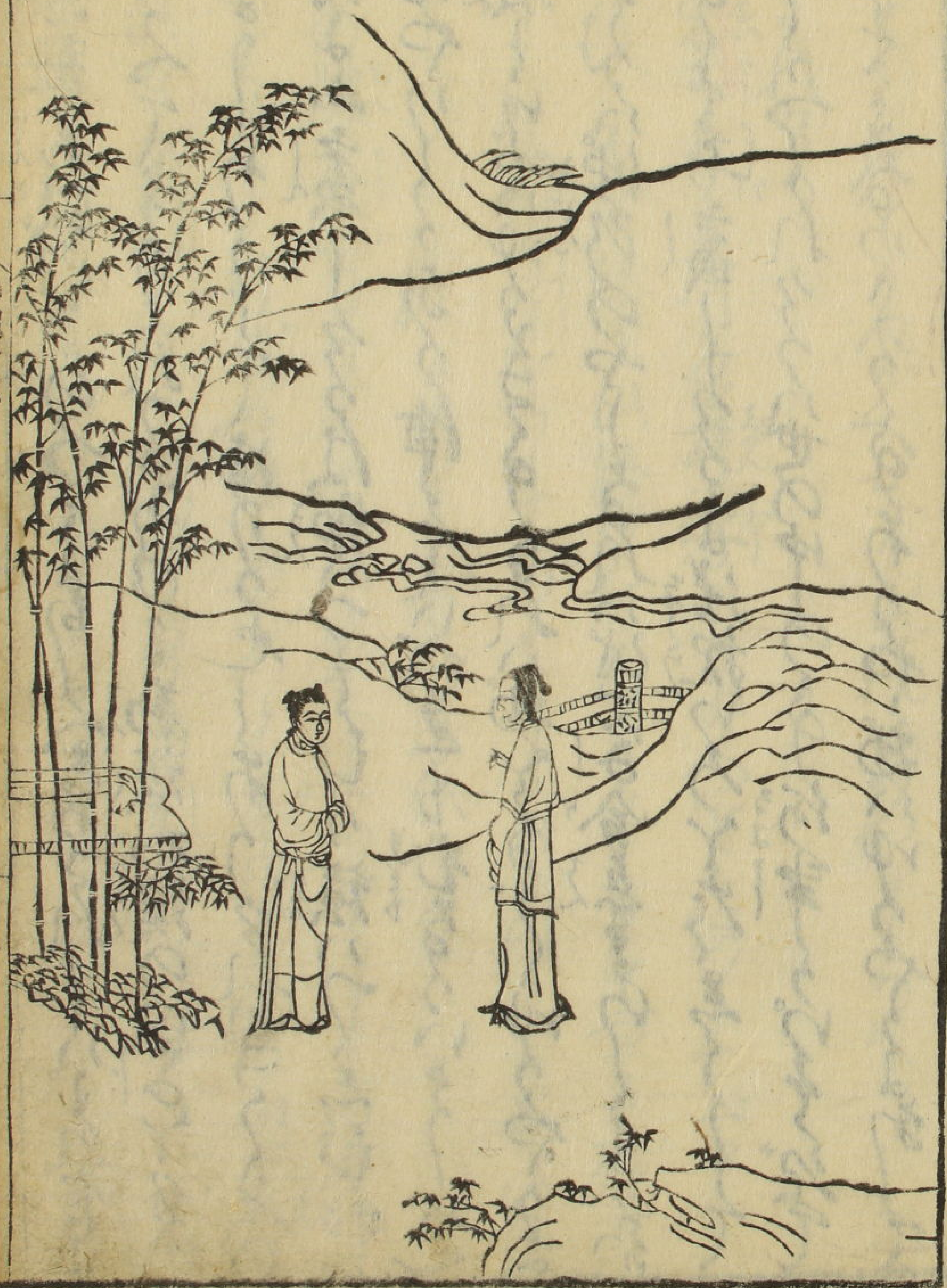
きん人なる位にものぼりて居られし人びとなりけるに
ある時武帝儒者をあつめて堯舜のまつりごとをきこし
めさんとありけれバ汲黯申けるハ陛下内心に欲おほ
くして外に仁義のまつりごとおこなはんとし給ふともいか
でかなひ給ふべきと天顔のいかりてやめ給ひぬ朝を罷
人のまへとさし給ひても益なきなるべしとおもはれけ
ますまりひ給へしかれバ武帝おほきに逆鱗ましまし
てけるか罷りおはしまさんとぞくらゐあるの
しに武帝もさすがにかれをうらみ給ハず直
給ふ也そのつくしのこゝろゆへにあつかふ無双を

やまれけるしかるに汲黯ハ人となりとして志よ
こびてへつらひおもねることもいさめるべしして気を
よおもひ志ゝらずバ不忠の罪のがれがたしとて此れ
をもて一命をうりもはしてせおきどもさそのむとあられ
ますふやまと給ふ也とぞやまけりその時大将軍衛青
丞相公孫弘などいふ大臣ありしが武帝厠にて
ぐし衛青にあひ給ひ冠せずして公孫弘にあひ
給ふ事もありけれども汲黯にあひ給ふにおいて
ハ冠をたゞしくせずしてハ一度もあひ給ハずとも
しける或時帳中に坐し給ふ時汲黯がきたるときゝて給へ

ハかんとする肉へうくれ入給ひなんとぞ
〇魏の翟黒子并州へ使にゆきて布を受てかへりしに
ほどなくあらはれけれバ黒子おそれて高允に
ありしまゝに翟黒子をあつかひして罪をしらん
みちのよ談合しけれハざる允かひとのなかたでおり
のまゝに白状して罪をまつべし只かへ陛下ハ仁政の
君なれハ赦免あるまじきものにもなかるべしとしめしけるが
いづれもしざる人びとあらそひておなじく申さればおしへに
へりしもそのかけの翟黒子又出縁貿よりの勅に
よつて罪しかれハこれハ又おそれましきとぞいひける
ゆるされ給ふべきとてありけれバ黒子ハ高允のおしへをもちひず
やしけるに翟黒子侯の異見をもちひずあらはし
らしてみづからおもてをあらはしけれバ世祖おほきに
逆鱗ありてつゐにくびをそこね給ひけるとぞ
〇ある時高允世祖の命をうけて太子に書を講じ
へさづけ侍りしが崔浩と共に勅して先代の史
のまとをきこの書をあらそひてしるさんとしけるにそのむね
まかりまさにしるせし罪により高允もつゐに
あされせんとし給ふに太子高允をたすけんとて
おがしめしてみづからまへおもひて高允ハ位卑き

○また太宗だうりまて崔浩かのこ〳〵く手付て
答るときもその給ひければみりしきをもおもんじ
おかりやがるゝんとめし歸給へるんがハ
太子孔給しんよくなり崔浩ハ拙だるハ升とやせ
しせずれよそうる毎やうよ安めとも手付給へバ
その答崔浩よりおのきゝう月みやくれも太
子氣の毒よおもひしかりだいま帝位よおそまき
まうひて十方なきさるすやふ給ふも程おやしーた
るハたらうやよしまうらんと給へしよこてうびみ
うし太子の何のそくうしたつる給ひしよさそうし

もはやたゞくまで太子孔給しれハまが久しく玄とも
さかけなりだしくる給つゆおそれしまそぐく
ハの給ふありとげときうやうれよまかれハそりて
みりじ獻感ありて死よのぞんで何とくさう氏
位うりなしして志とおぼしつゞる八忠也がつゝ
たゞしきむとおくすくころもべきまおしれて。
その死とゆかし後みし給へつしなん
○崔玄暐が母玄暐といましめひろく物せして人の
子孔官よつくへて貧乏なりときてゆのわく消息
なんしきゝゆんへおしまうるも官よつくへて親の



ちゝへ饌のもゝとおくりてぞその親たぐひろこふぞよ
て此饌のあまりいかゞあしてたくはへてぞあればあるとこたへ云
ゐりをせんとせざりけるハひがくるの也俗縁の肉と酒
しおきそておくるゐりバ奇特なれどもぞよし 纔
道なりとなるのみにてどうゆへの饌の亦を親におくるあり
バおもはへざるゐりこゝろもむやみとそいうべきなり

張觀叔陳門下のたくましへ生おきれしハこれ官よ
りくてうりこれありきぬ勤儀わ漢のにやくを見れ
いまもしてはりかせしおりされハぎくくへの
内よふ宸しるれハ勤ハつくもの禮ハつまむ頼ハ
物やりしつかの座てハつまでもむまついきうめで
援よらハゆかきるすれハ物くろずくゆかやうよ
まりかハ御乃のやしうれハ口一字合点ありしまいゑ
るすしふ宸しろうよ張觀をあたく志めして
こころうれくるハ世の中のるり何事りぱそうずて
志そてよずはききくるのおかるやおハゆかるやうよおして

あらされてくんずへせるされハおやまちあしらざ
やされなる
呂榮公并よ御子舜従ともふろをたのみて官よさして
もちすを禄ひ独らてたでまつきさ職葉
とうれ萬らりとつてきめそれりとあされとも。その座
あらうしあれまりとぞの筵ひろ
漢の陳孝婦ざし十六とそよなわりしいまさく
るとももうけざる内よ。どつと軍役よあつ附妻あるよ
いひろるへいくさよあつるするれハどう命ハ徒ぐめ
みずしれもしけるすくすり待しるへ一人九老母難

戯しゆるべし。後よりはかりてせんざいとさだむるとも
けられんやといふは陳孝婦ん母といふあかりし孫てて
うけがいは立ときれたるよけしとしてとつし死して
陳の孝婦幼寡としてつきてとしとおよはず
て孝りおこなひつ。わかさゆふることむすびさ(れ)けく
すなはちやしなひたてかくてこととせし
それたれは孝婦のおやもとのまゝあのこもなくてや
わかきよとあそれにかくふもしてこととらく
ごてびよありさせんと志けるに孝婦ハたへ
さくひおうて髪絶して志りとあともやしるんだ。

後つゐにそうしけるひとしくは世にあるべからずとてもせん
するにすりうしとてはよそでま自害せんとしけり
父へ親もおどろきおそれてそれよりのちはよめ入
のことをいひやめけるにかくて廿八年のあひだしうとめを
やしなひ孝行をつくしてしうとめは八十あまりにて
てはかなくなりけれはそのゝちの田地家屋資財
まてもことごとくうりしろかへておくりむかひ
たゝまつりや孝婦のなさけいたくひまれなるかなとも
これは世のあるさてうめし及び給ひの貞女と
おもへさけんはむけするのなりとそいふるの樣

戮(ざ)し給ふべし。汝(なんぢ)これをかりてせんざうをさとく
けたまはんやといふ。又ハ陳孝婦(ちんかうふ)ん母をよくおさめ給ふて
うけがひ立ちまちかゝるおほせをうけてをつと死して
後しば陳(ちん)孝(かう)婦(ふ)紡績(ぼうせき)をなしてぞすぐしとわざはひ
つて孝(かう)りおいてくしばおさゆふうこつむぎされバ
すゝぐうかてやしなひうかがくてさとせし
其のちこれハ孝(かう)婦(ふ)のおやもとのむさかのこをもすくてや
かおすゝるとおそれくハかふもしてこくゆく
ごてびよあゆりさせんと志け王ハ孝(かう)婦(ふ)ハにたく
こゝひおつて紫(ひ)縊(や)して死しともやしまうで。

後これ名をうしなひ給はゞ世にあるべくてもせん
なきことなりとて、しでよりも自害(じがい)せんとしければ
父親もおそろしさおそれてぞそれよりのちハよめ入
のことをいひださずして廿八年のあひだしうとめを
やしなひ孝行(かうかう)をつくしてしうとめハ八十あまりに
て死ければ、ことごとくその田地(でんち)家屋(かや)敷(しき)家財(かざい)
までもこと〴〵くうりしろかへてとぶらひまつり
かゝりしかバ孝(かう)婦(ふ)の心ざしたぐひまれなるゆへにも
これハ国(くに)のかみきこしめしおよびのち貞女(ていぢよ)とて
おんさゝげんハむげなるよりとていぶゆうの様(やう)

神こしめしけるにやがて参内せられけるに天子叡
感ことにあさからずしてげに褒美として孝行
の黄金四千行を給ひなほつぐその家の諸役を免
除し給ひけるとぞなん

○漢の鮑宣はまづしきものにてふかくいさぎよく
勤学おこたらざりければその師これを感じて
ひとりのむすめありけるをめあはせけりそのむすめ
はとみ人なりければひとつにさるいへにて家財
諸道具まで目をおどろかすばかりなれば鮑
宣これをみてはなはだよろこばずして妻にいひ

けるは我は貧賤なるものなればかゝる美
麗なる妻をむかへんもおそれありいかでか
うけ給はらんといひければ妻いふやうわが父
まづしきものにて徳をおさめ給へるを感じてわれ
をもてまつらしめ給ふなればともかくも君の
仰にそむくべからずとてやがてつきづくの
わかきものをぬぎ家財諸道具まで結構なる
ものをみなかへしてぬのゝころもをきてしうとめん
こきうともに鮑宣とともに小車をひきてふるさと
めよ孝をつくしけるといひつたへてかんずる

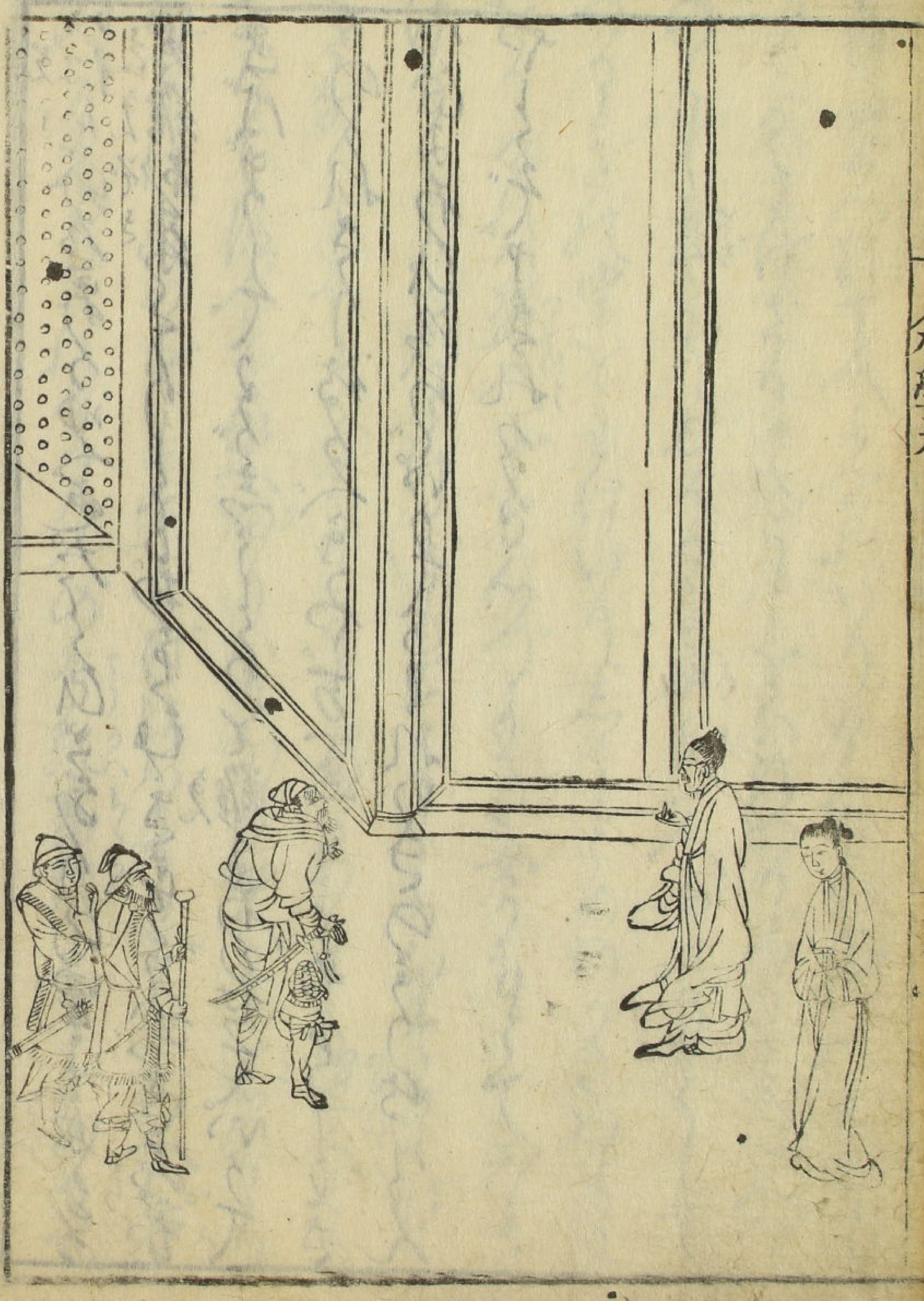
あくとくし節をうしなふことなかれとぞ
曹文叔が妻令女ハ夏侯文寧がむすめ也。文叔はや
く死して子もなかりしかバやもめなりしに
きバ。さだめて親父こゝろざしかへさせんと
おもはるべし。いまだその沙汰なきさきにそのた
ときるべしとおもひ髪をきりてぞありける
後ありてあんのごとく父母こゝろくへようづ
めんとしけるよしをきゝけれバ。令女せんかたなくし
てひそかにふたつのみゝをきりてべにはえざるなる
しせり。そのゝち梁の宰相そのゝかふして義

とおともにそのんざしと感じて。いかにもしてむ
かへまゐらしくおもひけれバ。人をしていひきかせけれバ
父母うれしくおもひ。又志をきりよりゆるせあそれ
を。令女いつはり同衣しさりてひよめてゐすひ
そかに寝やへいりてかたなをとりてふすまをかうぶり
ふしぬるに。その母寝やへゆきてよべども。さら
にこたへざりけれバふすまをひきのけたれバ
多く血ゆかにたゞよひけりとぞ
唐の鄭義宗が妻盧氏ハ学問のたよ好して。しう
としうとめよくつかへて孝行おこたらず。ある夜その

家へ盗人数十人ミだれいりけれバ家内の人〻ミなにげ
かくれさりてしうとめばかりひとりのこりて
のこり居られけるに盧氏一人ハ女なれどもして
つるぎの中をおしわけいり志うとめのそばによ
りそひけれバ盗人どもにうたれてなき
けすばかりうちたゝけれどもすこしもおそれざりけ
きかくしてさりけるのち盗人ども
さりて後家内の人〻盧氏にむかひて
おそれ給はずしてとゞまり給ふぞといへバ盧
氏こたへけるハ人の禽獣にことなる所

ハ仁義のあるゆへ也たとひとなりの里に急なる
災難ある事ありてもおもむきてすくふならひなる
ましてしうとめの難にあはせていかでか
すてのがれさり侍るべきや万一志うとめあやうき
ことにあひ給ハゞいかでわれいきのこり侍らん
やとぞ申されけり

唐の時奉天の竇氏ふたりのむすめありけれはむすめ
めいつきてもさとくうちにそたちけれと心たゞし
きみきりありけるかあねは十九妹は十六のとし天
下みだれ乱妨人その里へみだれいりけれはいつれも
山をさしてにげゆきていはむろのあひだにかくれゐたるを
のがれの中よりひきだしおしたてゆきけるにふかき谷あれ
はあねいもうとにいひけるはわれはしぬるともはぢをうけじとて
とて谷へ身をなげてしにけれは乱妨人おとろきさはく所にいもうと
座につきてとびおりしせしかはふたりながらしにけり
みかどのちにきこしめしてふたりのむすめの義をほめて



てしまづから志ゐをとらけんハおりまさずされハかられえ
たゞその喪をまつりんとてやうそふうき葬へ
身をとをけらせられハ妹も又おりてきゞ身をとをげ
よせくろしぞぱ京兆の尹ぜ又琦きてはけ
給ひてかくら貞女をわしいさはうしんハおいるまさ
あゐらりしてぱよの楊子鼻卿よ奏聞せられかれ
ハ天子旌表ましくしてぞの門閭をおくらしぶか
く家の徭役を免除し給ひけるとぞ
○漢の繆肜ハよくして父母よをくれ三人の弟と
くらしけるが弟どもをのく妻子をめとりて
てられども中あしくなり財宝をわかち別居にお
らんといひけれハ繆肜これをきゝてふかくいかるを
なげき戸をとぢてひきこもり杖をもちてみ
づから身をうちたゝきくゐていひけるハ
これ拙訥とうまれてその家の内さへおさめえざん
ハ人のよしあしおさまらず咎なりとてざんく
はうすべし身をうちたゝきけれハ弟ども家内のくゝきこゝ
けまれにかゝる義なりゆへつまかくミでいしあやまりこ
とごとくいゝなき叩頭なりとぞ○かくこそありなひ
繆肜が弟へゆきぞ今までの無禮なりしわびける

ゆるしなかるべし。ちかごろ侍るハ兄弟のいかなるあらそひのたぐひ
ましましてあひてなるをきかるべし。しころぞよび
このせけり
○北斉の時。蘇瓊南清河の太守たりしとき。乙普
明といふ百姓。兄弟田地をあらそひ。数年の間落
着せずして。双方證拠人をひきあはし。数百人に及べり。
その時蘇瓊乙普明兄弟をよびあはしむるに
しづかに道理をもつていひきかせられけるハ兄弟といふ
物ハ天下をたづねても又とえがたきものなれバいかなり
て。ゑがたきハ兄弟なり田地とりても得ハその身の

異姓の人ハおんいかに親しくむつまじくとも他人なり。兄弟ハ
ちかしひいまだ兄弟田地をあらそひ仇となりてさき
の心をおこし中わるくなるハ何事のかぎりなるべし
るをわきまへずして一家のそむきとなり。しかし田地
とりえたりとも天下の又とえがたき兄弟の。ゑがたき兄
弟の中をそむきてこれをおのれがものとするハ
やさしからぬことなりとおほしめされ。まこと
に涙をこぼされけり。数百人の證人もきゝて感じ
あへりけるが。乙普明兄弟かうべをたれ
もらひてへだてなくこれをわかつべしとぞ。

絶えたるにはゆづりあひ殺十年別郡となりし
ぐ父子の家へ立帰りてしるしあひかはしとぞ
鄧攸おさなくして伯道は晋の大臣也。永嘉の乱におち
ゆきける時妻子と弟の子をつれてにげのがれ出る
までもとしれなき足にあまりて行方の奥にいたりつ
ふたゝびのがれてにげたるとおもふより事ゆきけるに
とうとげ二人の子をつれてはたらきなんとするおりから
おもへらく我伯道妻にいひけるはふたりの子をつれ
ひとつは我や子とまるからにいづれも一人
すつべきことあり。かなり二人ともにふびんなれども

いづれをとりてかあいをばそだてかくくあんじけるが
その子細といふは我身は絶命なりとてそれ
よりさきに死したるにしければあいたくるれど
おとたゆりもいかに称せられくはいのちをうしなへど
へ綏しは父子なおるもなかへられは所詮たゞもつ
子どもそつべし。ひなれは妻もまたれうるもし
おのがおもふまゝに下知をきてうひおもくとり子を捨
てこけのびたり
○晋の咸寧年中天下に疫病はやりて死ものあまた
ありたてし庾衮が兄も病にかゝりて死して次の

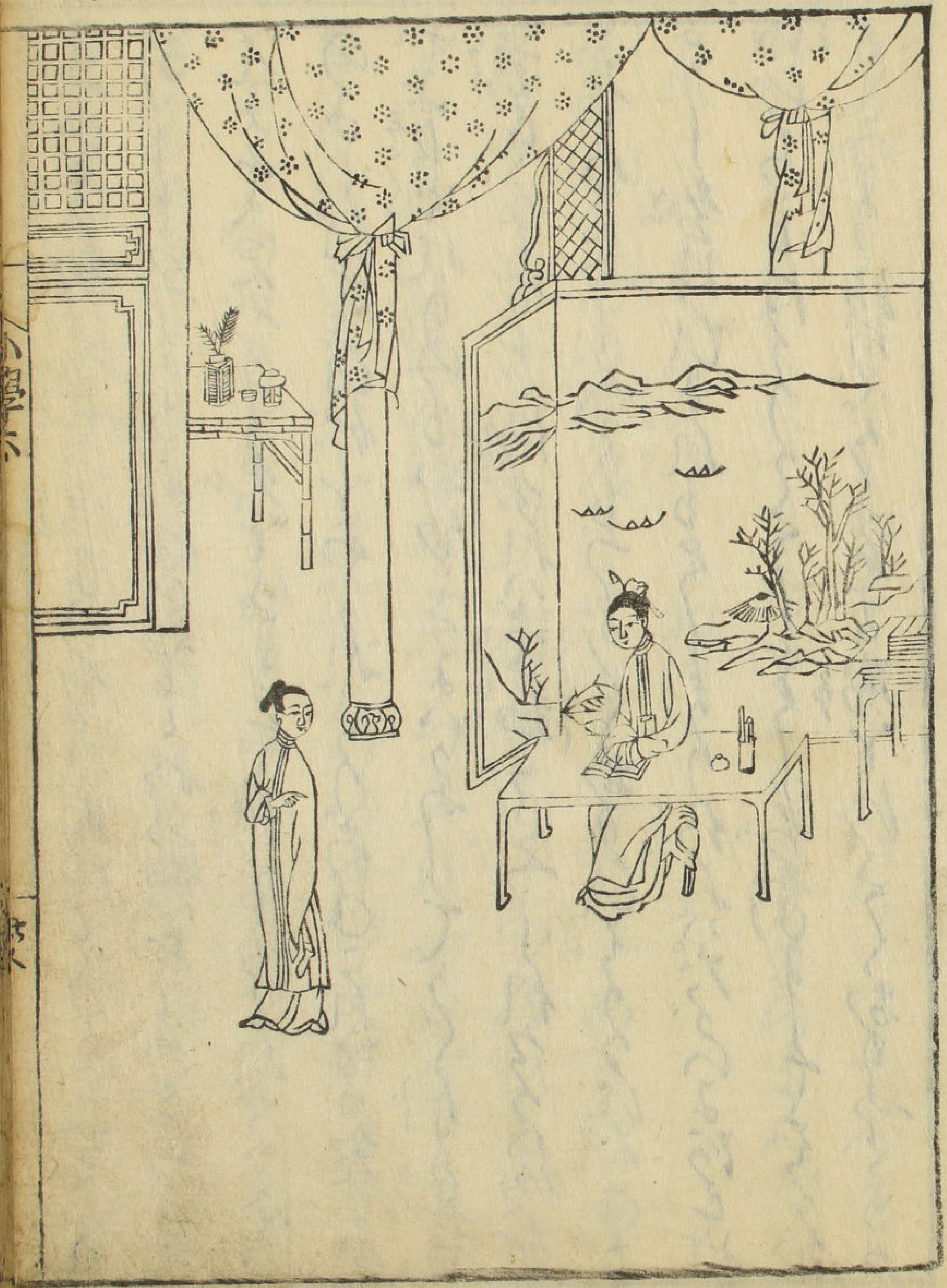
兄又おもくやまひしけれはみつからそのまくらへいて
て家内のこと〳〵くを人にまかせてうちへいらさりけれハ
子弟家長一人家をまもりて兄を看病して昼夜さ
らすおこたらさりけれは、ほとなくおつかひかけるその百日
あまりをへて兄の疫病もなをりけるまてさし平癒して
袞もつゝがなかりけりとなん

○元魏の楊播楊椿楊津兄弟中よくして毎日早朝よ
りつとめておきてその座敷におあつまり終日対座して
さらに内へいらず一種の食物まてもあつまらさ
れはくちへ入ず座敷の次にのまへんとうけ置て

としてうちつれたる時ハきげんよくそくこそかへり
てやすまつる又あつてあひさりふ打絶したのしみあり
兄の楊椿年をとりて酒に酔ひてかへりぬれは津の
楊津まくらをとりて内へともなひて世話をなして枕もと
をはなれずしてその安否をうかゝひけるか兄弟とも
に六十をこえて三公の位にのぼりけるが常に楊津
頭髪白くなりしかとも兄の前にてはあまさす命じ給
けれハ兄弟ともに兄をもてなしあへておもむきて日た
くれまて酒もいつまても持て食物をも
りそへ兄の御膳とも悉く食物のあんぞ

いゝて一ごとはなはだうるはしくぞへまつりせ兄弟子孫
よく命じ給ひて後までも文合し給ひけるも
そのゝち楊津ハ肆州の刺史となりて任に行し兄
の楊椿ハそのまゝ役にておもむきけるが弟の方へ
つかはすにも時の弟相めづらしき物あれバ丈夫を
て兄のもとへおくりてそのゝちそれも又豊饒し
たりとししきりおくりていまだ兄のかたへ
かたるすることなかりしかバそのまゝその兵ども
とふしハ一家の内に此代の兄弟一門眷属ことごとく
くはわりおつまりそうて百人斗もあそびけり

がおりひごとにまうでゝつかへてありけるとぞ
隋の吏部尚書牛弘の弟牛弼ハ酔狂人なりしが。
ある時酒に酔て兄の車にかけし牛を弓矢にて
射ころせり兄かへりて牛弘の妻むかへて
くげりくとつげゝれバ牛弘さしてとがめずしてそのまゝ
そのうしをばほじしにつくりおけとこたへけれ
ど妻はいかりをやまずしてふたゝびおも
ひてくりかへして弟の牛弼がころしまゐらせ
る牛を射ころせりとくれぐれつげけるに
とせりけれバ牛弘もとよりしれりとていひ



りをしぞそれハさまざまあれどもすべて志りやすからまくど
まなびのはじめにいひそへつまの文章まで書
物をよくしらしむるなるべしぞ

○唐の李勣ハ大臣の位にのぼりたつときくらゐなりけるが
なりしかども、あねのやまひける時ハ、みづからまめしくせ
んじ、そのかゆをにるとて粥をにられけるに火
のもえあがりてひげをやかれけれバ、これを見奉りて
て、かゝるのものもおほきにいかでかくみづから奴僕
労をもつかひたまふぞといひけれバ、李勣こたへけるハ
まそハさふらへどもつかへまつるひとのなきにあらねど
よし老給ひぬ。われもとしよりぬれバ、たびたびあねも
いのちもはかりがたし。不孝にしてさふらふか
くあり給ふべからねバ、粥をにてまゐらするもの
るべけれバ、これをおもんぜられハ、たゞいまこそかく
粥をにてたてまつるのハ、たゞ身のまんぞく
これに過じとぞいはれけるなり
○司馬温公ハ兄の伯康と中よくしてうやまひけう
へ給ふことかぎりなし。伯康とし老ひて
八十におよび給へバ、温公これにつかへ給ふこと父のごとくし
るし、また嬰児をやしなふごとくしけるまゝ
とそばをはなれずしばらく行て食物をとりてすゝめま
いらせて、すこしばかりへて腹中ハうゑ給はぬ
かといひ、天もすこしひやゝかなれハ、せなかをなでゝ

てざむくハおもし侍らねどもいましめりとぞ
包孝肅（はうかうしゆく）の法（のり）に後代（こうだい）せしめたる時おほやけにつかへて
まひなひをうけたる者ハ是れに金百貫あづけおきてかへらざる
ありしがその人ふ無（む）に果（くわ）給ひゆくへそのその子にわたさんとしけれどその子辞（じ）してうけざりければぞくへ
まかんとてうけとりしに永（ひさし）くその子をとめしお
給ひてけるもやしよ給ひけれ給ひれどもいまなよろ
けぞきそのまゝとめしたるの給ひ亡父（ばうふ）のあづけを
きゝたるもの（？）そ［illegible］給ひしうえとてさらに聞（きか）ん
せぐくめしく安（あん）人ならぬたゞいはゆづりあひてぞ

かくて落着（らくぢやく）せざりければ呂榮公（りよゑいこう）きう学（がく）び給ひ
いくやしき物のかくれなくありしハ導師（だうし）勧善（くわんぜん）の善性（ぜんせい）
わかれたるもあり所（？）みな変辭（きやうしゆく）ならべしと
古人（こじん）のいへることばをおもひおもふべしとぞふかく
感服（かんぷく）し給ひけるとぞ
漢（かん）の石奮（せきふん）ハ年老（おい）て隠居（いんきよ）しけれども内裏（だいり）の御門（ごもん）を
とほる時ハかならず車よりおり風輦（ほうれん）をみるてハ必ず
まへにかゝりて車の前の横木（よこぎ）に手をかけ礼（れい）をなしてぞ
とほりけるがこのこゝろばへ伝（つた）はりければ子孫（しそん）までも
官人（くわんにん）となりたる物もおもふまゝなれども又衣冠（いくわん）たゞし

うしてぞ對面せられけるが子孫の内にもしおやま
ちまでる物あまたあれバかつてこれをせめそしらずして
してたゞころ分をひづめ給ひてひめの人會釋と
らい給ひしゆゑくの子孫よりあひ難儀してその
おやまちせしものさいはいめでたく於當今
よりたとへばおしなべて待しんし再三まびするまゝされバゆ
るし給ひて會釋とも男ひられなかりし子孫の
内どもしたけ冠きたる物なりるまゝそれバされも
冠きさまされハ孫給ハずてかくの輪まではやるゝなけ
くけてつかはよろこびさよそくひとゝせ給ふ。

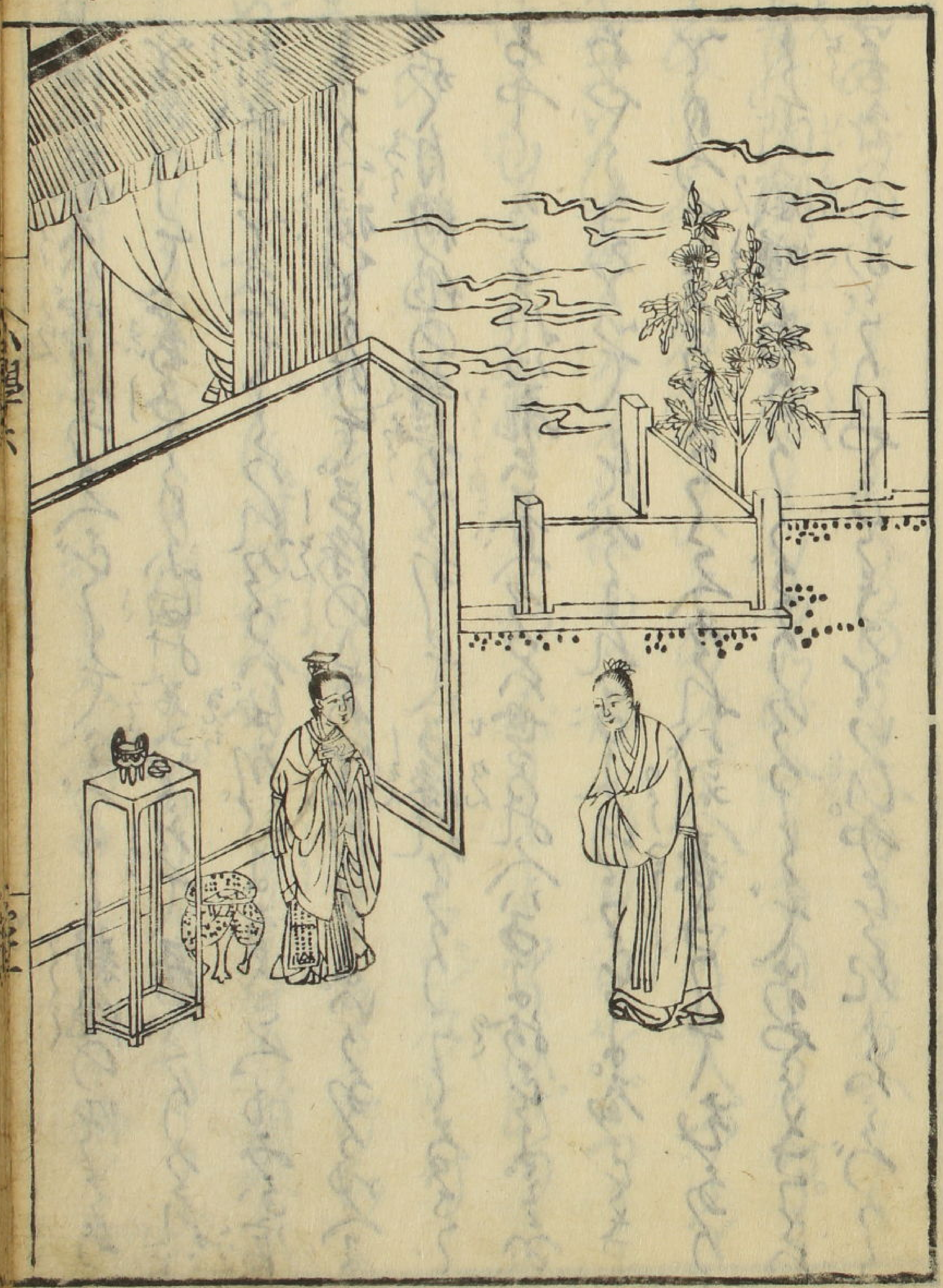
もし文定より會釋をゆるさんと給ひしかあれバ
かならじ乳母してつゝしみ會釋をゆるさずあまりて
會釋なふかりしバ二歳目の子石慶内史の官にさ
づけしがおの射車まのりあまり給りたりける。帰るま
でひつされて里の門よりいろ射車よりおりけず。石奮
これをきゝて又會釋もくらはずでいり給へ石慶
をそれがしにてぞうひてしまはれどもゆるさず。一
門の人ていつまでも申びられバそのうちて石奮やうやう
かハ内史の官ハ貴人なれバ里の門をとをる射まハ
里の老人おそれやまひてみなかくれしきかくる

るゝ也。志づかにいま車の内にゆくこゝろ不顧して、おり
ざるハ礼にそむくなりとぞ示されたる
○石奮(せきふん)が長子(ちやうし)石建(せきけん)ハ、きはめて孝行なりし人也。郎(らう)
中令(ちうれい)の官になり、年も長く歳(さい)られたる時まで、
父の石奮(せきふん)そくさいなりしが、石建(せきけん)五日に一度(ど)づゝゆ
るされていとま給りて家に帰る時ハ、ひそかに父のめし
つかひ給ふ人をよび、父のそうぶ・ふきもの・衣類(いるゐ)とかざみや
へゆき給ふ時の衣類とをとり出させて、みづからこ
れをせんだくしてのち、さて又父にきせまゐらせけ
るとぞ。しかも也、親(おや)のけしきをうかゞひて、他(た)人によそ

あつかひせし事を人にさとられざりしかば、かくこそさとさ
らぞや
○漢(かん)の疏広(そくわう)ハ宣帝(せんてい)の太子につかへ、太傅(たいふ)の官(くわん)となりしが、
功(こう)なりとげ名とげて、しりぞくハ天の道なりとて、隠居(いんきよ)を乞(こひ)けれバ
ゆるされけるに、老者(らうしや)をあはれみて、いとまを給ふのみぎり
みぎり、宣帝(せんてい)よりハ黄金(わうごん)二十斤(きん)を給り、太子よ
りハ黄金五十斤(きん)を給りて、故郷(こきやう)へ帰り、こゝに太子より
給りたるこがねにて、毎日さけさかなをとゝのへ、その一族(ぞく)・親(しん)
類(るい)・旧友(きうゆう)などをまねきて、ひたのしみをしてあそびて、月
日をおくりけれバ、一年斗もすぎて、疏広(そくわう)が子孫(しそん)・人々、た

のこして術紘しるさずといへどもみちにうつる
おほくのこゝろあるを書付しるしてもいでこゝろを
むねとし振舞をはかりやしなふことハおやにつかへ
けふは田記をおもくおもふハおもきことをさとりて
縁のもとをひとりしてあさ縁ひらすべしとなり
へいぜいしりてせ々りの疏廣とけつれみなたへい
まことのこゝろをつゐやし一つ回文とせずさしたれし
ひとのさしたみ縁のもとひとを出しらるゝおも
らばみ縁の毒葉をひむかしより指芽りあるべし
しかるにおき田記をおきてちりしをつねてこれをとた

かやさしハ衣食をそなへおりハおりおりへしきたの
を今文田記やおもくふとくかみ文ハおもく々の金銀
とゆへりのことハみ縁のたの栄記をおもくしてこれ
つきすびハおもり侍へしおゆて寶をおもくゆつ八
匠しるのおもんハ賢きさ人寶をおもくゆてかそ氣ん
さしを様じ画をおゆへ寶をおもくゆてハそおやまちや
まるなくびりんや文箱ハ諸人のうしむのふるれハたく
ひまれみ縁をおしへやりくうまとそのまてあしく
ともひへのしうとをけさせんみ軒とまおろかれ
かひうへやかそて縁まこゝろをやおしへまでその上に



こゝ母ハつゝしけなくもじみじらりたんぐわんきら
とおくれこゝやつて好へるこゝろをしれハいつらみに弱
ゆへさまおしんがつらゆへまおけくれ族への一族旧交
とおつめてきれたま田をとらんへよ貴族し甚の
てゆゑべみ日をおくるなりしとぞこゝくわれいろ

漢の龐公ハ官につかへずして、しづかに隠居のほとりにあ
らして妻子とゝもに田畑を耕して居られけれバ
劉表きたりてこれをみて、これハ殿身を苦しめても官
につかへ禄をうけずして子孫のためにいかなるものをかのこ
さるゝ自耕作の苦労をなして子孫に何をのこさんとするぞ
と申されけれバ、龐公答へけるハ、世の凡人ハ子孫にあやうき
事をのこすこれのみ。今われハ子孫にやすきを
のこすとて、もとより所は異なれど、のこさゞるにハあらずと
いへり。劉表きゝて感嘆ありけるとぞ。おやこ（？）の
隠居のおこりやこれをいふべし

そのちからハはかりてそばのまさにかなふべし
○晋の陶淵明、彭沢といふ所の令となりける時、
子のかたへ下部一人をおくりて、ふみを
かきそへ遣しけるハ、汝朝夕の用度をとゝのふるに
もしみづからなすことかなふべからず。よつてこのしもべを
ものとおくりて火をたき水をくむたすけとすべし。
なほこれもまた人の子なれバ、志ありとてむごくあつかふべからず。
めしつかふにしたがひ時の給分をも与へ、
よくあハれみても同じ人の子なれば
つかふべしとなん。下部も又人の子なれバふかく憐むべし

まことにたれが親もその子とあはれむべけれバ
ながさけをうけてつかふべしとぞいひやりける
魏の崔孝芬が弟孝暐兄につかへまつる事恭謙の
礼をつくして座をたつも命をまちてもむつましく
そくまも兄の命なきまてハあへてせず鶏のなくころ
よりおきさて兄の方へ見まひにゆき起居を尋ね
らうふして挨拶とうかゞひまいりだしひて一銭
一尺のきぬあれバ私にそなへてたくはへず
もちふくしまたくハへずして家内の者までも感じ
ていしらあひて此より他の者もありけるとぞ。

孝芬のしよう賢志なりけれバ父母よくをしへ給
ハ叔父またよくつかへ給ひけるが叔父をやしなひ世話して
おぢうへをつかへてそのくのさが母親よきそうしき
かわかす。翁多孝のかんれふかきのこうちうん家内
の子大事小事のことみなおぢにうつたへ
しかしひ又ハきれくの兄弟欽が玉よせけさかるさ
寶物とても己にあづからずおぢうへにわたしたる海
つりてなくしのたくハへとせず。甥ふあれハお
ええく支配しはんをうけてかくのごとくし
て年月をおくりその後年あまりまで露もたが

ハざりけるとぞ
王凝ハ平生行儀たゞしき人なりけれハ子孫のとも
がらも衣冠たゞしくせざれハまみゆる事あたハ
ず室の内に居る時も朝廷の公儀に居る時
のごとくつゝしみけるこそ家をおさむるも勅検
恭悌のごとくなれハしへとをしゆるも家をたゞしくするにハ冠
婚喪祭のごとき礼を用ひ給へり賢人の書籍并に
古儀へきはめ衣裳も礼のごとく美しくして家
居住などハよく丈夫にこしらへてかざりつけ
く門巷の地より樹木をうゆるまでのことハ方角をは

つゝしみましてすこしもゆるむ事なかりけり
○唐の張公藝ハ九代の子孫一門眷属ひとつ家にあつまり
麟徳年中にかくしけるにも高宗皇帝張公藝が
家へ御幸ありて勅諚し給ふハ親族の中も年久
しき間にハだんだん口舌もある物なるに汝が家九代
まで同居して家おさまりおだやかなるハいかなる
はかりごとにて奇特なりとぞ一族におほせてむ
のあるべしとありしかバ張公藝硯
紙をとりよせ忍といふ字を百あまり書てたゞ
てまつりける忍といふハ堪忍の儀也上下ともに堪忍

のみを情ありしかバまことに家内むつまじく夫婦睦
まじく暮しけり
漢の董永ハ隠遁して家まづしかれども常に
ふかき人なりけれバひるハ田をたがやし夜ハ学文
して毎日おこたらずひまにハ山にいりて木をとりなどし
のぞみて奠をとり父母にたてまつりてそのり
うちやまにて貧窮しなりけれバ父母をうしなひて妻
をもとむることなくて紀実のみちにしてひとりの
しめたる人父母もよろこび給ひ妻子もうけたる
げにのがれがたき孝道のおこなひを道に感

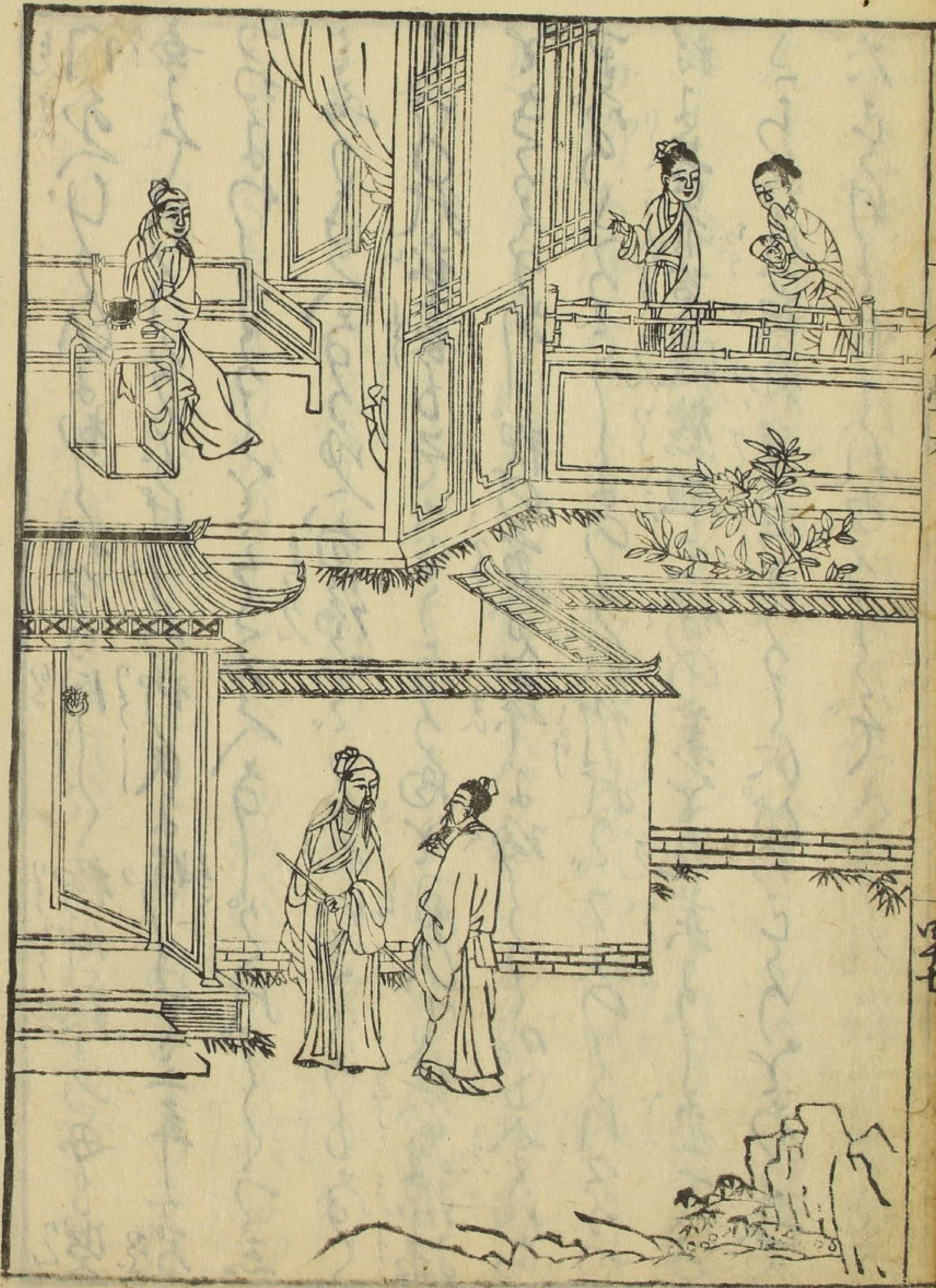
通じけるにやおやしきうへの本来よりぞ家に
飼置ける犬がもとより親犬こと〴〵く其ゆきをうけ
る鶏も雛子ハ猫ともしらず鶏をきたりて虫とも
をついばみあつめて雛のこにあたへてそだてしめ
たりけるかハさるかの時ハ鶏かゝりしをきゝてぞ感じ
くはしくぞつげにさそひて雛のこをわすれ親犬の恩
までもちなみしとぞ
漢の柳公綽ハ家法をたゞしく行ひたる人也家の中
門の東に屋をつくりて学文所をたてをきて本位の日
の外にハ毎朝かならず早天よりふみを読ひて私の用をすべ

弁じ客人はまじはり貴ともふも気合して以て
ゐるまでその肉をさしは燭いされハ吉若へとる
よせざるもこれを上りて官まつりの帝おや
ともきむるの情あるを議論し給ひ或ハ文友のつどひ
論じ或ハ聖そるを川てんをたのしく後夜の纏
ときうて綿ホへ終りふし給ふうくのごとき純統廾
年餘まで一日もかはることなりし也節度使の官に
そむかり給へハ家ともしかるべきれとも世の中おし
き年なれバまさにそれによ蔬食を用ひさせてはさ
也ろかハむかし亡父冊例のちゃ纔支終ひし法家ま
づかるされども近ごろハ兄弟の子どもはやまく学
業未熟なりとて、ひとりは蔬食をもちひさせ給
ひてはいかに魚鳥の肉を食させるのをゆるし給ハず。
これまよるひまりてこれも又[illegible]しゆるしぬるまでふ
そぐてざる也とそやきれるハ又おそれおほいかう
とめいるすぢに物の肉をまいりけるにして父ようち
是ハ又いとしたくろうまでやめざりしある人おれバお
それこめづらぞむこととゑんてゑんよつけしれ
るゝが揺備うる衣礼諸々ととりとくのぱお
つちおひのそまうあうよそあひまそもまかへやくお

つまうけてやしなはれたるハ家訓おもく礼儀よそなへ
んとせバ月日のびゆくべしぞうきうありしか時く
うしなハざりしは、まことによろしくぞやしなはれたるぞかし
ち柳公綽たすくるよしなひて子の柳仲郢ならびに
当しは、よろづ父の家法にしたがひて、おちの柳公権
につかへしも父につかふるにことならず、ぶやめ
にあしさればなり。公権は悔にゆかるに東帯せざるなし
公権官にのぼりしのちも、諸侯にて公権にゆ
きあへば、かならずかくりて礼をもて公権
の人おりしくれにおよび悔いるれば、かならず東帯して

門内へむかひておくれたる間し柳仲郢の母も賢
女にておりおりかげにて柳氏に嫁して三年なるま
でねよりもとらるるへすがたしくつゝしみ
ころもかへするもゆへ勿論くどくいさゝかもなく
てつゐに家衰もそれにすぎてあへて綾羅錦繍
ときるものなし。親の喪に遭ふて時も今流ち
まじてくるしよのしに竹氏てよのしれたるつ
時に苦參黄連熊胆三味の薬を丸薬にし子
どもの昼夜勤学せしにふくませてそ
たまへけるとぞ

○東晋の陳褒が家ハ十代のあひだ兄弟ひとつ家に住
して一門の人七百人に及べり。朝夕の食物の時になれば
はひろきむしろをしきて次第〳〵によりすゝみてく
いけり。その家に飼置ける犬百あまりありけるが
此犬どもに食物をあたふるにも一疋にても
てくりせざるまではその外のものもくはずして待
来らぬ犬あれは庭のこる犬どももくらはずしてま
ちけるとなん。これ陳氏の徳に畜類まで感化せられ
しあらきぞや。それより後も子孫かずおほく同居し
て宋朝の時にいたるまで十八代の家。おもてにしるして



ひとつ家にまじはりくらしけるとぞ

○宋の李相昉の家は子孫数代同居して二百人あま
りにおよべり。田圃よりおさむるところのもの并に
官につかふるものゝ俸禄にいたるまでことごとく
ひとつ蔵にいれて、ときどきそれぞれにくばり用
ゆ。婚姻喪葬のついへもみなつねの数あり。
かくのごとくして家をおさめけり

右実明倫

○漢の鄭文矩は、わかやかなるよりたゞしき人なりと世の
人いひあへりければ、おなじく鄭文矩をよびて、方
のおほやけなるの世にすゝめしかば、ばんにんもしたがひき
とおほせをうけて、ひとにしへらるゝは鄭文矩をかなしみ、
松のみどりをまもりて、身をおさめつゝ、かしこくも
よろしき人の位にのぼり、政をもおこなひて、さだまりし
たる時、千里をもしる名馬をえてまゐらせんとせしに、辞
退して、ひとへにおのれをうけずして、位をさらん
ことを、官位をもすてゝ、辞職をねがひけるに、たゞ
人のおもひをおもひはかりて、ゆるされけるとぞ

くわう見家にありていはひおさなきときより
ましましけれバこれをきゝてすきまおしたまひて父
しづ兄の子やうやくしけ時ハ一歳にすこしも兄弟
にゆきき禄んはにおりなからもすれとも悔りてやまで
時ハやもてく禄いの世のづからにしまつしけ時より大
とひてつびもなきまいされとも気づかひにおよばず
うき中へよもなうし禄いし喜びこれも文給乃
人なしとやとてそいひけり
漢の劉寛ハ人におさまりくる人にて儀に終そのいて
ぬからくてもそてうしもさなぐりさりぐそのまゝ妻
あまりよふ錦きるやうにおもひこゝろみんとためさん
とたくみて束帯して出仕せんとしけるおりふし下
女に膳をもたせてすゝめけるがわざとかまへてあつものを
こぼして衣裳をけがさせしかども寛しづかにひつけなから
ゆへ下女をせめずに膳をとりあげてはまづきそのおりに
に膝のまわりへうちちらしけるに劉寛さわがずして
もとをうちもさわがず色をもかへずしておもむろに下女
にいひけるはあつものにて手をやけどせざりしやと
ざりしかといふもいかりやはらぎたりしとそ
漢の長湛ハつねにおごそかにして礼をこの見

行儀（ぎやうぎ）たゞしき人なりければ人したがひてこれをならひ
あからさまにも行儀をくづさずいつくしくもてなし、つねに
妻子（さいし）に對（たい）するにも主君（しゆくん）に對（たい）するごとくにて、ひと
よそほひしめやかにして在所（ざいしよ）の人にまじはるにも
ことばをつゝしみたゞしくして人の手本（てほん）と
なりけり。光武皇帝（くわうぶくわうてい）の御時（とき）、三輔（か）のうちの官になり
たるが、いとまを請て故郷（こきやう）へ帰（く）る時、故郷の官人
のつかさを遠（ゑん）せん（ん）にみて、車（くるま）よりおりてかちにてあゆみけれ
ば、ともの人の申すは、御身は位（くらゐ）たかく德（とく）たかき御
身なればかろ／＼しきふるまひしたまふべからず

といさめけるに、張湛（ちやうたん）こたへけるは、禮の法
には公門（こうもん）をとほりて路馬（ろば）に軾（しよく）して、御門（ごもん）のまへをとほる
時はかならずおりて車（くるま）よりおり、君の車（くるま）をみるときにも
はかならず車のまへにて手をかけ礼儀（ぎ）をなし
てうやまひ給ふ。そのうへ孔子（こうし）も故郷（こきやう）の人にはま
りいやまはれ、ことをつゝしみてつゝしみ給ふ。故
郷は父母の生国（しやうこく）にて、これをつゝしむべき
ところなり、いかでかろきことやあるべきとぞ申されける

漢の楊震ハ安帝につかへまつりて忠義の心ざしふかゝりし
ゆへいかにもして賢人をゑらみて天下をおさめんと
思ひける折から東萊の王密といふもの才智賢き人なりけれバ楊
震これを挙用して昌邑の令となしけり。王密嬉しく
思ひけるにいかにもしてこの恩を報ぜんとおもひしおりふし夜に入
そかに黄金十斤をふところに入れ楊震がかたへ持
ゆきてひそかにおくりけれバ楊震さらに辞退せずして。
ありて王密をうらみていひけるハそれハ天八知る
又われもしるまたしる

まゐらせしかバかれハ王密かきてぞやがてかくハされ
バとよろしくおもへとも志り侍らぬハ故人のかくれとも
くらきよるとて夜中のことなれバしるものこそなけれ
となりてぞまゐらせけるを志るものなしと申けるに
鉉息のいぶかしくおもひて王密をかへりみ
に楊震かへつて同心せずして申けるハ夜中なりとて
しる人なしといふべからず合点ゆかざるとて
天しる神しるわれしる汝しるといひけれバ
王密もはぢてかへりけると
なりとぞ

漢の茅容ハ耕作たくしける人なりしがおりふし
ともがらと雨にあひ大木のもとにおほくの人とゝも
にあまやどりしけるがおほくの人ハ膝をくづして
おしならべてゐけるに茅容一人ハひざをたゞし
くつきて座してことに行儀をうやうやしくせしを
郭林宗といふ人とほり合せてこれを見て
ありさまを見るにおほくの中にたゞ一人行儀作法の
たゞしきをこそいつもの人ハたゞしく見えざるに
あのひたちよりぞ付まつりて郷里にかへりしがも
ありくもてなしけれバ客人ハわれとおもふにとり茅

容が家へいたりて郭林宗アしばしやすみたまはんよ
對面しけるにそれともしんぎし親切なれバ、よ
ひハこゝに宿りし給へと取留してつひに一宿志けるが
茅容あくるあしたにおきて鶏を料理
志けるを郭林宗つくしてみてさだめてわがた
めの地走ならんと推量しゐたるにおもひの外
容ハ相違して鶏の料理ハおのが母にすゝめよそのか
へてそれと郭林宗とハ別によそにそまつなる調菜に
て食しけれバ郭林宗いよく感じいりて[illegible]
おきなりかりけるとぞ

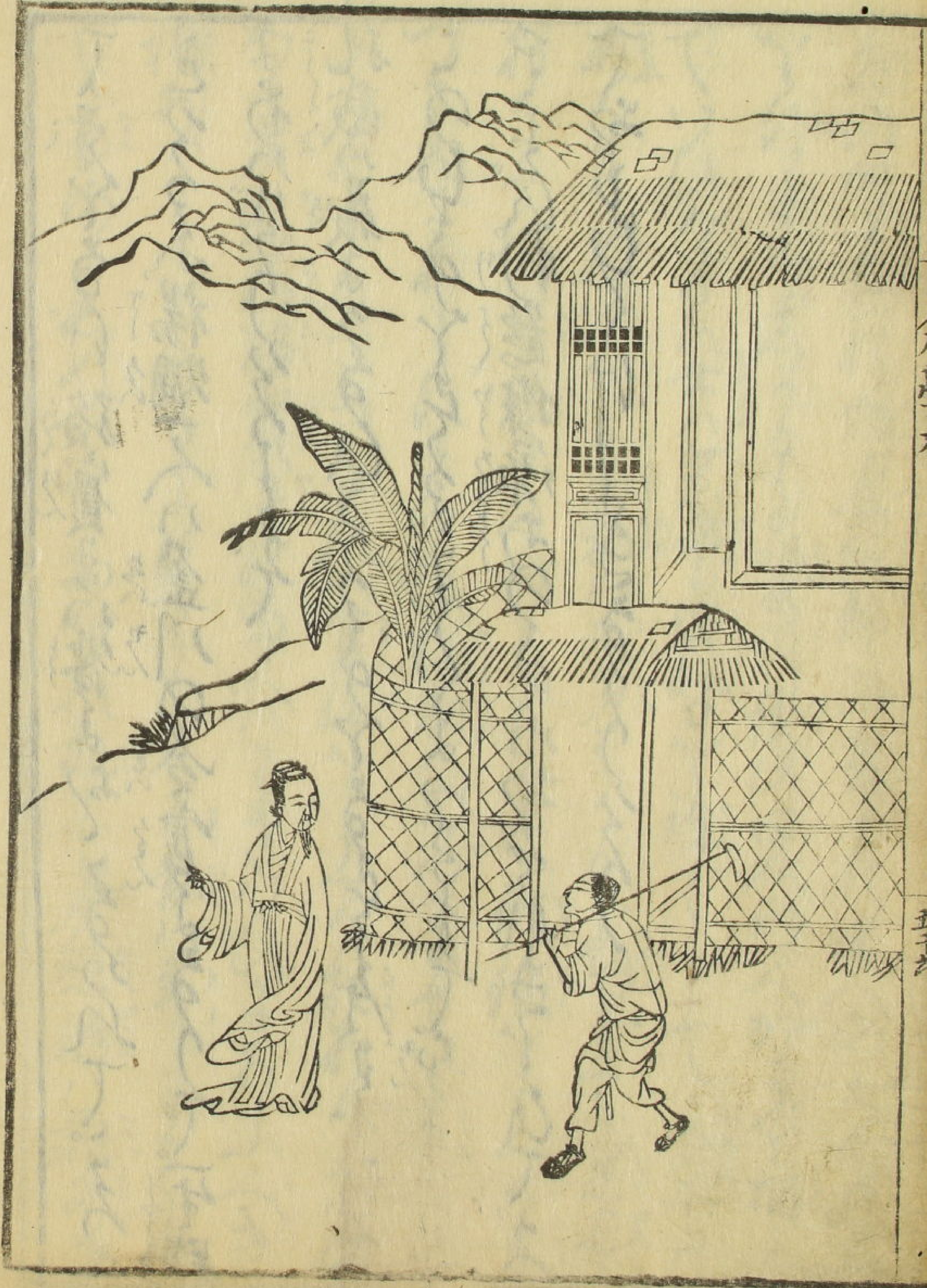
○晋の陶侃廣州の太守たる時何の用事もなくて
ひとりなる時ハ毎朝百枚のかはらを家の外へはこび
いだしておきて晩にまたハ又内へとりいれしを
ある人ふしんにおもひてそのゆへをとひけれバ
とひしかバ陶侃こたへていふやうわれつねにくの
がいを[illegible]世にむすびつけんとおもひつゝくて。
軍功をたてんとおもふゆへ平生からだをつかひならはし
あしくバ肝心の時の用にたつまじきとおもひてかくのごとし
まづ毎日かくしてからだをつかふぞやとぞいひき
きこへけるがのちについにかくのごとくなりけれバのちの奉行

然れ共たゞしくしてかゝはおこなふのおく。勤(きん)さんれ出精(じゃう)のとりかゝりなまでもこくゝ自然(じねん)とそうられ。毎(まい)日客(きゃく)に対(たい)してかしこきも志くしきもかけつゞけてすくおいまいられくりつはまへよりくれぐるかむかし大禹(う)ともさせつ聖(せい)人ハ寸陰(いん)をおしむとて一寸の日影(かげ)をもおしみ給ひし道(だう)徳(とく)を修(しゅ)し給へり。聖(せい)人さへかくのごとくなれバ晋(しん)の陶侃(たうかん)まいりて八分(ぶん)の日影(かげ)をもおしみて学問(がくもん)をつとめ、人道(だう)をおさむべきものや。志かるにけふ程をうかう/\まと暮(くら)して、いたづらに月日をおくり酒宴遊興(しゅえんゆう)

興(きょう)にふけりていきてても何(なに)の益(えき)なく死(し)しても後(のち)のおぼえなきハおさましきことのかぎりならずやとぞや。されバこそわかき者(もの)に世(せ)間(けん)雑(ざう)談(だん)太八われらすべてけふよりいひて酒(さけ)をもちて囲(ご)碁(ご)象(しゃう)棋(ぎ)でくらされあそびなる酒あまたちゆのうつく物ぐくちのたゞ事(ごと)をこそくるるかひとつして門へいでてさせまびしくれ招(せう)えんせられなることぞつねに衣(い)冠(くわん)たゞしく威(い)儀(ぎ)をとくのへ聖(せい)賢(けん)のおしへをまもりて乱(らう)雑(ざう)のなきこのむものゝおのらつがう威儀をいましめるべし

○唐の時。王勃。楊炯。盧照鄰。駱賓王。此四人の文字に名
をあらはしけるに。裴行儉。此四人の人がらを相し
ていひけるハ。士ハ器量識智を先にして。文藝ハ
末なり。しかるに王勃ハ文才ありといへども。器量
あさけれバ。高き位にのぼりがたく。俸禄をとるべ
きうつはにあらず。たゞ楊炯ハしづかなれバ。そのつかさ
くらゐまでハつとめさるれバ。官位をたもつことあり。その
ほかの盧照鄰駱賓王此二人ハ。よくいきのぶべき
相あらずといひけるに。はたして王勃ハ年わかくし
て。水中におぼれて死し。盧照鄰ハ癩病にて

て身をなげ。駱賓王ハ謀反におこなはれて。ころさ
れけるに。楊炯一人ハ盈川の令官になりて。一生難
なくをはりけるとぞ
○孔戡ハ義なる事をこのむ人なるがさき
このむかしそしりてくはへんとて。讒言しける
つるに。利欲俸禄をのぞまバあやぶまれきとしひてかう
てかもむけしきなりけり



○柳仲郢はつねに身をおさむる事たゞし
く座しては手をこまぬき居て行儀をみだらず室
の戸より表へ出るには必束帯せられし
いつもの事也位たかく禄もおほけれどもよき馬の
厩には倹約をまもりてよき馬をかはざる事もありしひまあれ
に馬をよく衣裳に香をたかずしてたゞ書のみよみ
郡庁よりかへりてはたゞ書籍のうへをよみて手に
まきをはなたずそでに官につかへ民をおさむるの法めで
たき猶其道をまなびてそのつかへ奉公せし
傍をときよひて浮容せられて下代の咎を宥免せ

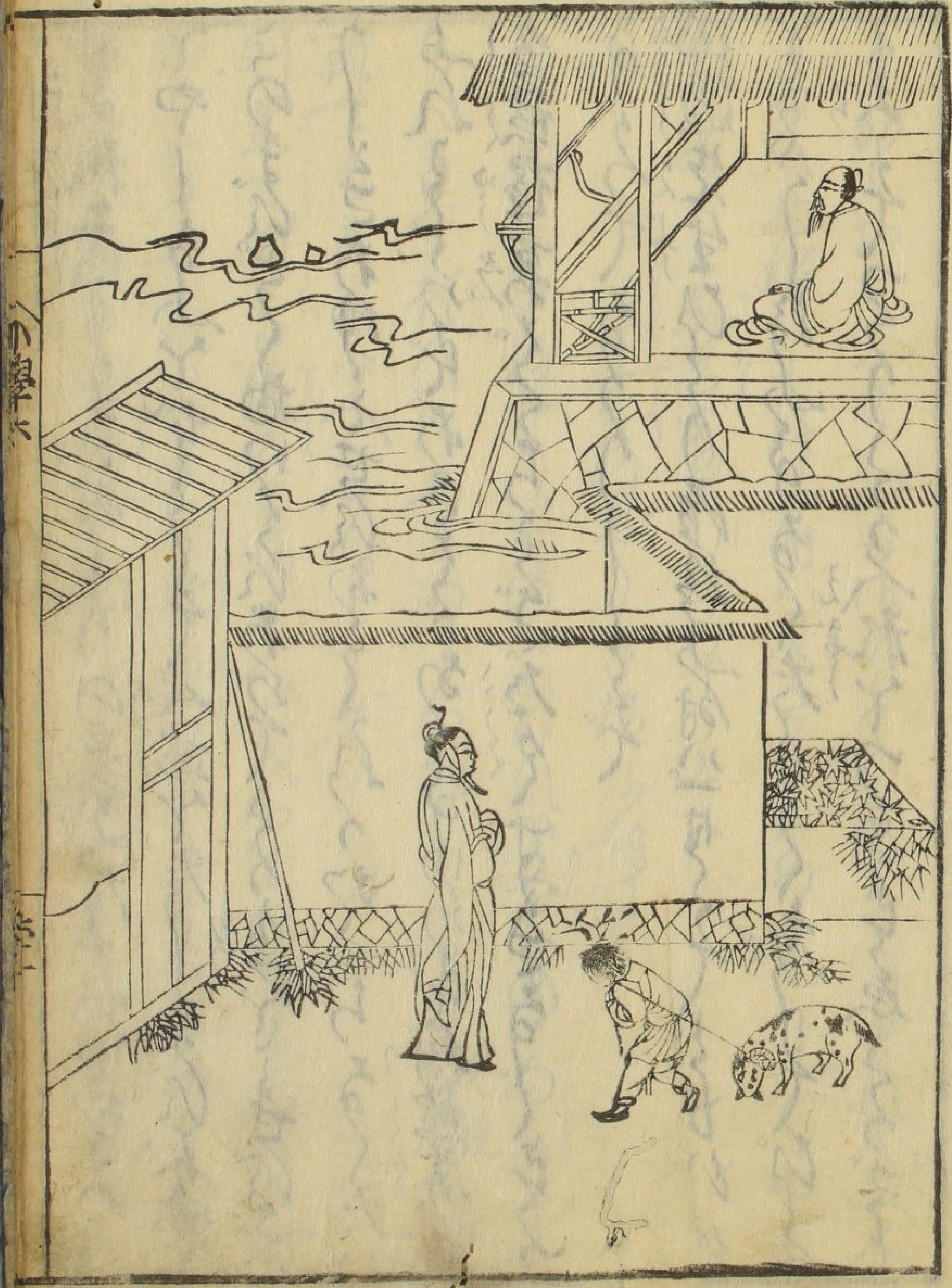
ぞ。然るにひさしく子なかりしに。洪水旱魃
すぐのわしき年にも。萬銭をおしまで民にあたへ。城
づ兄の兵粮とつかはしたりしに。一時軍勇をあらはし
また客人とよび軍兵とおもてなし。東の時は行の
をあし。まさに致仕し。緒聞に或はまづしく
見えること子なりけるに。いづれもたかくつまれ
うまつる女あまたありたるを。かうしらへてお
つかはされける
○唐の文宗の時。王涯宰相の位のかぎり。てんか財段を
志をえらびし。これをとめくさるゆゑのかきりあり

王涯がむすめは竇氏に嫁しけるが。あるときいは
ひけるは。世にまたなきうつくしき玉のかんざしのうりものあり
まうすが。そのあたひは七十万銭にきはまりたり。いかに
もしてかんざしをかひとりて。われにあたへ給へ
かしと申しけり。そのとき王涯こたへけるは。七
十万の銭は。わが一ヶ月の知行なり。すれども。これをわ
づか一つのかんざしにかへんや。されどもつくし
かへりてはだかるひとつのかんざしの七十万の
銭にあたりしは。きはだかるにあらずやいかれ
は奇怪な儀の相しおかへされはとしかんざし

とらへられハかうしくにまさしとひてまのく遣し
けしよ錢をおしむよハなくたゞけしされけれハ
其理をふくしてむそわもかきりのて無らしせざ
りきりけ二三ヶ月もたゞて又むそむわきうりて
王涯よりくりけるハ先のくんぜしハ馮球とい
小官人の妻くひとりてかしらよさしけるを見
うりといひけれハ王涯さちをしけきさう風情よ
てやきれけるハ郎吏の官なるものゝ妻なるを
がしのかざりよ七十万の錢をおしして買いうり
わらゆハよろしきらかよわくにべかくし其

りまとみのしわりなるふ殺なくるの官人馮球が難
よあひ死しけるとぞ
王文正公ハ家まで及第して家身一ツにしくらぶ
されぬひとれハおろくたりけれいひるハけよかさ
ぶみて追封せる位ある官よのぼりぬひて一生衣服
飲食は貧にあるのまのくあひぬらんといひそれ
ハ王文正公けしよざれしとんこりける終りにもろ
とたづまりしてこそ人ゆるむりしまりこゞ平生
のんずうしだくなるのくわりてがりて遂むきの
くりのまんおりひもおされとぞ終けん

范文正公はわかき時よりおほきなるこゝろざしまし
くて富貴をもねがはず貧賤をもいとはずそし
られてもいからずほめられてもよろこばずうれへの
ありてもよろこびうれふることありてもいた
まざりしのたぐひまでさらにその心をうごかさ
ずしてつねに国のなげきをはいたみおもひて
天下を太平ならしめ万民をやすくおさめん
とするそのこゝろざし給へりかるがゆへに天下のうれへを我
嘗て志給ひてつねにいひけるは士たるものは天
下のうれへにさきだつてうれへ天下のたのし
みにおくれてたのしむべきなりとぞの給ひけるが
のちかれなりしかれバ君につかへてまつりごと給ふにも。
たゞ忠節をつとめ給ひてまうしたまふにはよ
しあしをはゞからずしてまうし給ひぞ給ふことをおほした
まふも。そのつとむべきことをつくし給ひてぞその
そのかたりなしさるゝことをぞけり給へるさりけり
○司馬温公つねにの給ひけるハわれおこなひ人に
すぐれたることはなけれども我
平生なすところのいまだ人にかたられざることはひとつ
もなしとぞの給ひける



魏の管寧は、ひとつの木ごしありて、平生はそれに坐
しけるが、五十余年のあひだ、つねに足をなげおしとう
する事なくて、日夜朝暮ひとりゐにひざをつきゐたり
ければ、そのひざのあたりける処ことごとくうがち
けりとぞ

呂正献公ハ、わかき時よりの学文だん〳〵とおさめ、性
をやしなふを本として、人欲をたしなみ、美味
このまず、みだりに物いひをあらそふることせず、さハ
がしきありさまもせず、おこたれるかたちもなく、たハ
ふれわらひ、いやしきことバを口にいださず、利欲栄華声伎
遊燕宴わだくにおよばず、好具すきまにこゝろ
なかりけるとぞ
明道先生ひとり居給ふ時ハ、日をくらしても、行儀
たゞしく給ふすがたハ、たゞしく座して、ひとへ
に、土にてつくりたる人形をすゑおきたるがごとし

しかくおごそかなれども、ひとたびかれ友人
にあひ接し給ふ時ハ、まことにやはらぎて、やはら
かなること温気のごとくなりしとぞ
同じく明道先生の弟伊川先生に時まじはりてから
書くそうな給へり。そのかみしれハ文字のおろかく
らんずと、和ひ給ふまでにいまだ学問のた
理にかなへる事なりとぞ
劉器之、司馬温公に問ひて、心をつくし、おのれを
おこなふ事ハいづれの所要ぞ、一生の間おこなふ
べき事のぞと、たづねられければ、温公こたへ

溫公ハ誠(まこと)しいふあることそれなるべきこと終身の
まことの誠をおこなふにハ何よりさきにおこなへ
きぞ。その誠にいたるぞとしからのてとられなきを
みだりなることをいはざるよりはじまるべ
しとこそ。劉公は劉器(りうさ)をおもひけれなるへからく
つまるところいはざるものゝありけれはやすからす
おもへしとはじめてはゞかりたる
すびしと檢遠(けんい)せられ身に推(お)しはかりつゝしみたしか
このみてもそれなれバことのほかにおもひたまひし
おつゞきよおこなふのはおもへるかなり

おのれかへりみてなりがたきことのみおほし。劉も
これぞれよりのち七年のあひだつとめおこなひて
後のほどなりてはじめて言とおこなひと一致(ち)なり
なりしとぞ

○あるはしく劉器之(りうきし)ハ行状たゞしき人なりけれバ
客人(きやく)と對談(たいだん)せしかどもすこしも久しくむかひ
ひざをもうごかさずそのまゝにて肩(けん)せなかはつ
もとゞまでもうごかさずして手足(てあし)まで
もうごかしけるものなかりしとぞ

○徐仲車(じよちうしや)ハ安定(あんてい)先生の門人(もんじん)にてひそかなる

おもろひて官につかへども職をやめて帰りし母に
つかへて孝のきこえありければ天下さしへ初めに
安定先生湖に海へてしりぞく時から一のかたく
ちからしりぞくるきこえハ先生教をたげしらし
ていましめ絡ひから一のくちすとくせらしわ
すらしめられれをおしひろめておのよハ此らに
ハひとりから一のあのかよぎろくからばしなお
もつ文のくみことくおのくしとおのハ工夫せし少人
それよりなおへてもこし海すりんわしくしにぞ
○文仲あいハ范やうかの衣裳をきまひ大じけがれあり

ゆびつの銭用ひられ綾羅錦繍ハかつて家に入
らずそのかろつの絹をきまひ
○言識る珠る諸兄弟三人なじしる官よのなく
なれしもぞよの会稽郡よ六けびらつぎいひかわ
肉をも用ひてこゝ物を用とさせぬ夕めしの時よ
ハ野菜ぞろりまて合せられなかりしそ
○李文靖ハ宋の宰相よなりて威名世よ
りやきうしがらが家をたてられしよどひのかせバ
きさまおいうてそ言関のおもあらく一疋のうるとめ
ぐらまぞ狭くしてハらの絡ずりされハおのく小ゑ

しかば宰相の家居にお越せさせ給ひしに。
李文靖といひし人ハ家をつくりける廳ハ馬を纏すまで
まづしかりければ猶のちをおもひはかりたまへと人
おほくすゝめ侍りしかども此家ハ宰相の家に
してハせばけれども隠世の子孫の下官などが為
これをわりたりてもひろきにすぐるべし
ぞのたまひける
○張文節公宰相の位になりても家持の様子むかし
しの下官なりし時にかハらざりければある人
いさめたまひて今富貴なる身となり給ひて。

むかしにかはらざるハ公孫弘が布被のつゞしハ倹約に
すぎて却てそしりもあらんとなりこれも世の人の云ハ
あらきをしかりのたまハずしてかの公のいはく
我今の禄にてハ一家のこらず
錦をきせ玉を食らはせんも何の難き事かあらん。されど人
ハ常の情にて倹より奢に入る事ハやすく
奢より倹に入る事ハかたし。今の禄いつまでも
たもちがたしいつか身をしりぞかん時
ならハしぬれバ倹約にかへる事
かたかるべきとのたまひけるとぞ

あんぱむたゞ今のうゑてらの示現をたまはりしいへども人
の身上ハ志きまね相手ハおすまも君の人ハかりつ
づきうも志てしバ又うちゞ身のきちるくるべきさすも
はかるすし万一左様のあやまん付てちぶ家乃他
情久しくおぢろりつけるうや儀ようづきやうまセ
んとんともおりがくかるへしつわくひおりんで
かりそらきれざるゆへとちゞ家の他情ハ位よ居ておく
位をらしるひても存生ても死去しても己
らしもうつしさうやしよしぺうけ待るめしもて
こうつられ候事

○司馬温公の父郡牧判官たりし時賓客人をつき
あひ給ひしに客あれバかならずさけを出し
ますに或ハ三盃或ハ五盃まで七盃にいたらず
くハ酒つきさけハ市より菓子ハ梨栗棗柿なんど
のたぐひなり其ほか野菜あつものゝ
さかなハやきもの物の煮物の煮て魚ひしほさ
きゝへゆき給ふ時もかくのごとくにて風俗
ぞうつるのそし温公の時ハ人ごとに奢侈
をあらそひて数日あつめてはじめて
客をよぶことのつまりおもひたらば

つねなりと温公ハかたり給へり
○司馬温公ハ天性華靡をすきこのみ給ハず
きたり幼少の時ハ父母のしりぞく乳しのくをはかりより
金銀珍宝の衣装をきせられバはぢかしくおもひてぬぎ給へ
り二十の時及第志給ひて聞喜宴にて天子よ
り花のかんざしをたまハりて衣装にさし給ひし
時もその花をかざし給ハずして其のたまもの
なるゆゑさらにて花をたてまつるやうなれど
しいきたれバそむきてたゞ花一枝をとりて
ざし給へりとやしのびたりけるゆく殿

寃をおかすよりハ貧ハ飢よりまさりて渇
構するをきらひ給へり
汪信民がそのいひけるハ、人ハたゞあさき味ひと
あまんじて、野菜の根をかみてもおのれ
しのびすくハ、万のこと成就すべしとや
胡康侯これをきゝてふかく感ぜられけるとぞ

右実敬身

倭小学巻之六終

倭小學之一書爲兒女愚蒙而作也若夫鈎玄探頤則別需諸家之註觧而可也庶乎後之覧者質正其矛盾云爾

時

明暦四戊戌年夷則吉辰（萬治元年也）

辻原隠士沙木子謹誌

次朱子者山崎闇齋先生也
萬治元年春在東武
萬治二己亥歳二月吉日
江戸白金町
罷河四良兵衛尉
京二条寺町
埜田弥兵衛開板